燕石襍志

15
1492
4

門 5
1492
巻 4

(一)異東方言

筆笥軒　瀧澤解　琑吉述

早稲田大学図書館 昭和35.2.1 受入 和書 藏

早稲田小学校図書

ものごと今と同(オナジ)からざる人の言葉(コトバ)も古言(ムカシノコト)に悉く失たるもあり東(アヅマ)の
わさも亦古言の遺(ノコ)るもあり大約伊豆相摸(イヅサガミ)より以東なる民間(ニンカン)へ今(イマ)も古(ムカシ)の
通(カヨ)ざるをとぶらへてこゝろんばらんこの
とふとふの義(コヽロ)より此(コヽ)ちかといふやうの
詠(ヨメ)る歌(オホ)まゝり亦とふとも詠(ヨメ)るをたゞ
ふとふを中葉(ナカコロ)まゝり歌(オホ)も再(ミヽ)び障(フサ)ることゝ詠(ヨメ)を亦もちてと通(カヨ)ふいふ
のごと古今集(コキンシフ)まゝりこゝろもちてこゝろべを肖(ムカ)とするれいへと
あらくのどやむやうてさやをとふるをあべいせべ答(コタ)をもべのこと書(カケ)
ばまゝりおんへいもうもおのといふ言葉源氏物語(ゲンジモノガタリ)もおえたる歌(オホ)もある古言(ムカシノコト)の今(イマ)も

東のかたに送りかへをしらざるものハ関東可とて笑ふめれどその笑ふ人こそ笑ふべし江戸の俗白物を罵りてべら坊といふなどのべらも可なり古今集に可なりとぞらるゝと読るをつねさくあるべしといふさとび云すぬにべいく云葉とぞくことさら耳なれつやゝそれゆゑ亦武蔵下總の田舎びたるを明白にいひかゝるとき状といふ江戸人ハ何といふ何を如何の義なるべき歌袖といふ語ハ古く草紙物語にも數多見えたれハ何といふからぬあるくに愛たし又おかづてといふ俗ハ語のさかりにむかしといふおかしざるさなどといふ常のことにて江戸人ハ今にそのいひおくるあれりといふまゝみむめもと通ひてまたむかしもやうもの轉語で是則殺伯謹言の言にて古言の遺れるなるべし亦駿遠甲信の國人ハなべて云をといひとをもいへるをせばく食ふべきを云ぞといふこのことばハ爲の義にて古くぞ單物語といひたるとせしものをいへんどものきるゝと書たるにあるしさるべきをといふうとも笑ふにたりぬ又江戸人のやうといふべきを京より以西なる人ハ云べてさうひとかいふからハ間なり濱臧天書二天神云。雖二天一神造功。何能一夜之間有二娠平。これ間宮を妙なと訓して澄なりからといひてより彼処ちぢといふ義に秋の吹からに秋の草木のしをるれバ古今集文屋康秀の歌に新撰万葉集にハ打吹丹秋之草木之芝折礼者ともありと詠じたるからも間なく秋の山風の吹く間に草木の凋といふなり亦とらふといふものもからにかゝりしかれどもそれを甚なる秋ハ行程と熟して人の道をもくらしかし見に近きといふところハ昔よりその間くち俗わ見ようちなどといふあるれバ今うちといふをも昔ハ程といひしよりといふも是より彼處まゝと限せるゆゑそその義ハ知りつべるなれどかゝるといふこそ雅なれされバみやこびの云葉なりとてかいふも毎に雅なりにおもれど京師の俗もいさゝめるものハ近江人の云葉に化せられたりと見ゆるも多くていと訛まりて紹舎繁花の地ハ諸國の俗言に化せられおのづから田舎のいひざまもおのづから好くなるくゆきてよく程に流行云葉といふものさへあまりて出来るゆゑ古言ハ大かたに失

るものゝ如く辺境村落の老幼男女ら古言も遂ず朝ゆ
失ひつゝ野ゆ求るといわるゝ人をもつゝのべむうん

○宝の山へ入りながらもを空くもどり給ふの常言の唐山の古諺なるよこゝもと
ふるくより雅俗の口實ともするやいと二代實緑巻之六員親四年正三位
行中納言伴宿禰善男が奏状ゆ悲宝山之徒帰。痛刀一抹
之永割とのゝ語ゑてより後くの絵ゆ今昔物語よりそれを載よ
ものべし

○今昔物語のくわい下ゆよのゝ二十巻の日本後紀い舊史よあらざるよ
因よりの今写本ゆく行るこゝもと
既ゆ識者の辨あり後人古書より輯録るるのるれい後紀の
残編あれどもいざべられど足らざるとゝ捨るくて愚いそをしも
引用ちり閲者怪むとるのるれ

○むこうむくまるりよるれい世つゞ婦女なりまごこ向まつひとい隔まつ

○推児の物ゝひあらふ時ゝの長ゑをゞ絡るくをうゑ短ゑをゞ重ねるくいう非
物を比喩るくゝ教るもあるゞゝ幼少ゑとゝの紀言ゝのも不憂られどその非
言が常となりて老ほけても改ざるゝ傷痛く飯をまんまとゝの言くと
りふるゝ尿をそくとゝのゝちくとゝのみてそれがくそこるゝをうんことゝのゝ息慢
ることを教るるゝ美るりのをるうるゝのゝ痲癈くみくゝ誓るくゝ神仏をのん
るう天のことのゝ南くまくゝ南安の弥陀仏の南を累るくゝゝるるべゝ安養
をぐごとのゝ美くの彼へとひと通ゞ勇をとことのゝいらるる義ぞやるを
ととつゝかへうりとをまをまよたるくゝ猫をまゝあくとそをくゝまるん

物の二ツをぐうたをひとゝふひあさてゝひの如ゝゆそこゝ八重まるん
今俗ゝ誤るくやまことやり初の黙累くるを八重とゝふ八重垣八重山の如ゝ
○今の俗さゝうる脱茅のくちく脱ざるを以らくまるとゝのいらゝ昔の字書
和名抄云玉篇云苛音何。和名伊良小草生刺ゝとゝりこれるべゝ

その鳴音をいふのみ餅（モチ）をあんずるといふのみ餡餅（アンモチ）を小麦ぢう酒（サケ）をとくることを酛（モト）を辞（ジ）するといふ赤小豆（アヅキ）をあることのみいそみ色の赤けれ[illegible]ぞうすをあせ物をおるぞとのみ数（カズ）くるぶべ居（ス）るらん又の菜（サイ）ともいへられい菜（サイ）蔬（ソ）のるるべ[illegible]よ魚類（ウヲ）もべ[illegible]菜（サイ）といふをろ好（コノ）むに悪（アク）物（モノ）をかつけといふを飯（イヒ）よ[illegible]食（クラ）へべくらの餘茶（ヨチャ）をちゃ[illegible]香（カウ）の物をおろ[illegible]あよ舞（マヒ）をねんね乳（チ）をちるどのみへ二ツ三ツうりにつ五ツ六ツぐの假（カリ）ばる限（カギ）るぶ[illegible]を今の婦女（ラムトメ）のいられを雅言（ミヤビゴト）ありとおひとりてや三十四十よるのよそものれ[illegible]餅（モチ）をあんもとのひ赤小豆（アヅキ）をまゝとのみいろよ[illegible]下（シタ）の餘米（シマイ）をこうちまぜ味噌（ミソ）をもり荻（ヲギ）をお茶豆腐（カベイシ）を[illegible]鰯（イワシ）をもうさ[illegible]渦（ナベ）をろ物とのふうーあの草紙（サウシ）もびとの草紙よ古人の論（ロン）ぶられなをれべ[illegible]ふの我（ワレ）ぜ[illegible]ホ按（アン）をるよ乳（チ）をちとのみ乳汁（ニウジウ）とつぶてちゃろの義（ギ）をんばらゝ[illegible]ゝとるの優（ユウ）なり

昔（ムカシ）ありし人（ヒト）諺（コトワザ）ハ今（イマ）よ遣（ツカ）ふるもおろう[illegible]諺（コトワザ）草（ザウ）とのみのみ和漢（ワカン）の書（シヨ）ともよ[illegible]その如処（ニヨシヨ）をひけるのをんれが穿鑿（センサク）附会（フクヱ）るもあるぐ[illegible]ろを二ツ三ツたる記（シル）をう今（イマ）俗（ゾク）情（ジヤウ）ある女子（ヲナゴ）を罵（ノノシ）るぐ[illegible]ろえたる[illegible]ゝ為（ナ）ぐとうぬやうをあれ物も[illegible]ぐえぬぐろ女（ヲナ）よろうのられたる云（シヨ）ぐとおり又吝嗇（リンシヨク）なるものを嫉（クヘリ）ぐ褐（コロモ）ともたゞい起（オコ）ぞとのみの諺（コトワザ）ハ今（イマ）普（アマネ）く物語（ものがたり）巻（マキ）の十二よ[illegible]妙（タヘ）ぐよ宝（タカラ）の山（ヤマ）のぐまをむぐ[illegible]ぐちぐ[illegible]ゆるたらん[illegible]ぬるぐ[illegible]ろ受（ウケ）ぶられたるぐ[illegible]ぬ土（ツチ）をつゝ[illegible]んとのみとをのいとゝ[illegible]ぐりぐりのみ云（イヒ）ぐとおり宝（タカラ）の山（ヤマ）のぐ[illegible]ぐ[illegible]ぐるとのみぐろ唐山（モロコシ）の常言（コトワザ）ぐ虚斎（キヨサイ）雑書（ザツシヨ）乗（ノリ）引（ビキ）よ所（トコロ）謂（イハ）ゆ[illegible]一貫（テ）、山空（ヤマクウ）手回（テカヘル）者（モノ）也とのみ語（コトバ）あるぐ[illegible]を雛原（ヒナハラ）湖（コ）翁（オウ）ハ[illegible]ぐ[illegible]ぐ随筆（ズイヒツ）よ載（ノセ）られたり赤丸雑廻（ニヤウデウカイ）よ[illegible]ぐ[illegible]ぐ云（イヒ）ぐ。余（ヨ）在（ア）二[illegible]一都（ミヤコ）度（タビ）燈市（トウシ）日（ニチ）二以（テ）遊戯（ユウケ）敬（ヒトヤスミ）覓（ミル）二一ノ古書古畫竟（ソウジテ）不（ズ）可（ラ）一得（エ）真

入ラ寶山ニ而空シク手ヲ却回リ。良ニ以テ自ラ笑ス也。といふをふまへりけれバ塵山
ちり出処ありて古くよりいふ諺なるをしらけて今昔物語にも書れたるなる
べし亦狼狽するを味噌をつけるといふこれハ太平記巻の三十五にみえ
たる桃井直常敗軍の后に當時の人の落首なりとて唐橋や塩の小路の
焼しより桃井殿ハ鬼味噌をすれといふ狂歌を載たりこの下の句の味噌
をすれといふハ今俗の味噌をつけるといふ事とおなじ直常ハ勇敢無双の大将
なれど世人鬼桃井と稱じけるぞあるる人の狼狽したれバ鬼味噌をすれと言
ひしならん村酒を鬼ならくといふごとく鬼味噌といふハ蕃椒味噌のことや上の句
に唐橋とおもくなる塩とつゞけ小路を麹まうけて焼し鬼味噌と続け
たるべ鬼味噌ハ蕃椒味噌のことにて又食物の赤くてその味の鹹きを
鬼といふ鰕を醤油の漬焼にしたるを鬼から焼といふ類おほくあるなり川
なほへいへるといふ諺も昔より唱来れることかしく　堀河百首題狂歌

集にハ川ぞちらすとしもあるや拂ちらずとも又拂ちらずといふ歌のみえたり
拂の字ハ術の譌なるべし歟和名抄に拂ハ和名比知岐。功程式ニ云。
肱太云云とあれハ肱とよむなるにや又物の忽然と失たるを天窓の蠅とも
鼠の不知ならんといふこれも昔より唱来る歟北村季吟子の山の井　慶安元年
卯行也全部五冊あり寛文年間増補まく増山井といふ名集を今世に行るゝ　その日のかゝる正忠が發句を載したり　松ひくハ
ねずみの知らぬ日なるとなり
鼠は今俗小児の物をひろひかくす類にて鼠をちかしくいふ彼が鳴音のちう
とよめんがて抱朴子に鼠壽三百歳。善憑一人ニ而卜ス。名曰仲。
能知ニ一年中ノ吉凶及ヒ千里外ノ事ヲといへるをおもへバ世俗ハ鼠
を仲と呼ぶなるなんどかゝる抱朴子の説に稱つけ亦和名抄に四聲字
苑を引て鼠ハ呂與反和名禰須三穴居ノ小獸。種類多キ者也とあるを國訓
鼠ハ又家鹿とも　として鼠を舎の盗賊とし和名抄にもいへりなどいひ傳へこの義歟

又不寝竊の異称鼠の全身は鶴皃く世俗は頭髪のみ黒しよりて小
賊を天窓の黒き鼠といふなるべし
○白波緑林の故事によりて盗賊をしらなみと唱へみどりの林といふは
しるところなれど是を其名に白浪と書くはその義に称へど其名に白波と
書べし又盗賊を今俗はどろばうといふなるはいかなるところと通じ暴に戻
暴悪の暴なるべししかるに世俗は只甚角が五元集に泥坊や花の陰にて
●ねれさりといへるをみて泥坊と書くものあれど泥坊は原来假字なるを
あらぬ暴も坊もその假名をしらぬゆゑとあはれなり亦世俗小賊を昼鳶と
いふ唐山に夜鷹といふ怪鳥ありこのものに対すべし五雑俎に茘支果将
熟專有鴞盗縁枝接樹蹻捷如風園丁防之若巨寇
然瞬息不覚千万樹皆被漁獵名曰夜鷹云云又棍徒を
すりといふ郷談雑字に 郷談剪扭 音正 掏摸と出せしは是を契沖阿社に華叢集

あらへ謾人はものもそこにもなしこれを久しくいましね山のこともたちといふ歌をふくて
麁字をと當たるは亦字語篇には須利と書く梵語なりと注したれど出処詳
ならず彼がちをちがひ法ならんと思ひたれと
ひとりまた念秧杜騙を胡麻の蝿と名づけたるはその賊なるや否やならんかと
是を胡麻の上なる蝿に擬ひたるか亦少女を豪奪して是を略賣するの
を世俗かどわかしと唱へ勾引の二字を當たる乃唐山にいふ拐契の賊にて和
訓かどはかしとは其門を迷して他処へ誘引の義ならんへの人を誑かすを
ばかすといひ狐狸の人を魅するを又ばかすといふぞそれは馬鹿にて馬鹿は
秦の趙高が鹿を指て馬なりといひし故事なるを世俗もそらしまぎる
すべしとてら無益の辨なれど筆のついでに注しつ
○九月より十二月まで夜長く比諸職人夜をとらえて作事経営するを夜なべ
といふ婦女子の燈りに縫刺するも又夜なべといふ一説によるに夜なべは夜編の京

○俗 夜も活業を勉むるものハ主人たるもの茶粥を烹てこれにあたへし故に夜
鍋といふ寒き夜の薬餌を小鍋にてといふが如しと或ハいふとの説非なり
よなべといふ昼のわざを夜へ延てするといふ義なるべし夜のべなるべしのこゝろと通へ
又夜並の義ともいへどもおしなべて家持家集に宵々に天の河原ならせども
ゐるみにいふともおもひじとぞよみけるハ夜並なり月次を月並といふも同
並ぶにて毎夜にする業なれバ夜並ともいふなるべし
○回答の和訓ハいらへなれバ人は物いひかけられてといふべきをあいうえをとよ
通ハしてこゝへおとをもとむるといふなるべしそれを又音便にてあいともいへども
ともをこひとるもうんともいふなりそうを應字に當て應答の義とする説も
非なり應ハおうとこそかけれバあるもうなるも通はず又あいといひへいといひ北國の
人ハはいといふなる語の訛なりまた往古驛馬のくちびくとき人を警しむる
言なりをひふへわと通ひそれとをいふともいふといふ説あれど回答の義に
稱なぞ亦いらへのいを唯といふ説あれど唯の假名ハゐなれバあやまりなり
通ハざるべし日本言語の字義に引あてゝいへる事なり
○今俗人に對してあるをござりますといふ又ありますをますといふなまりと通ふ
と通はしてますともいひめんといふ事も敬の言葉にて在をまするゝ 御座まるの
をまうしめん 聞行とも往古ハ卑人などいへどもしかるよりござりますをれ坐有ますんある
ござはくますを合聞といひんハその義に稱かなバ加嬶御座の和訓をいひますもる
にれ坐ありますといふハ重宝にて今も婦人の書翰にハをりしますなどいふを書
かゝりそれも出在の義にて雨気つれてをりしますん日和よくをりしますといひ
寒くをりしますと書んに人の寒気をとするとおりのみりに時節のなへてを
死を寒くをりしますん暑気をおくてをりますといふからに寒暑を殊ならが如
言を簡略にせんとして字音を唱るにもまんかのまとやかせとなりてかへる僻
言多かれど俗骨ハ削ずして俗ハ俗に隨てそのこれものを擇めといふとも

めんど殊にその義と違ひのものゆゑだも漫ぞそを古人もこれを綸じたり況
うたゐとい新年の賜とのみ義まそれを学ぶ人らこそ〳〵ゑと稱ふべき
贈る人うり標よ年ゑと寫とへ不敬の罪をこそ受るものもその不敬をこそんべ
年ゑと書くる紀玉い賜の假字なるよ書くる音よ端くねんごろ〳〵傷らとそこそ
とぞ〳〵この畢竟そくらんの茶いそくらん病が胃くみとの物語よ似たりとある物う
いるとえおら玉い砥とのらん枕詞みくおるとこ年ゑを
うりこそんとうそや近属俳諧牡丹の歳旦よゑの春と詠るおるとこ年ゑを
ねんごろと読と同ばの説うり物本を作るるのホられよあるでその亜るところ
一言半句だそらもう〳〵婦幼よ快よんとく純正りとろ〳〵俗よ近代を肯
とそうれば洩そうるうのこ者くりされば〳〵今の作を物語を雅文うく
ことのく紫女とのへぐもそべるうん放りくとうれべそのことを述その趣を盡
まる衣冠うり懸鶉うり動静云為うり喜怒哀楽うり瞭然とそく〳〵諸の
官前流演義小説の書を編よ俗諧をうそそぐろうう彼水滸傳などのよ
りのも雅文をうそられを綴らば施羅も学〳〵功あらん且唐山の作文い雅俗の
ニッのこ我東方いられよ倍〳〵く雅俗よ新故和漢の四ありられを撰ること
易くべさもあらべめれ稗説瑣言い部事よりそべれりのようねど名利の
例よ拘ふりのい解〳〵そくものれを枉るもあるべ〳〵他を識るいと易くべあら
るとい艱難〳〵成らべい識よと古人もこれりまづくその緒を味かべ〳〵
閑よりい江戸の書肆扨もそ作者の稿本を種本と呼るへ
どえゆべに辟言い足利時代のゆを綴らんとゆのそれを享紀後をそ紀ものと
もとべくその据どころとそべ紀書藉を種本とそのべけれありゆよ世い編

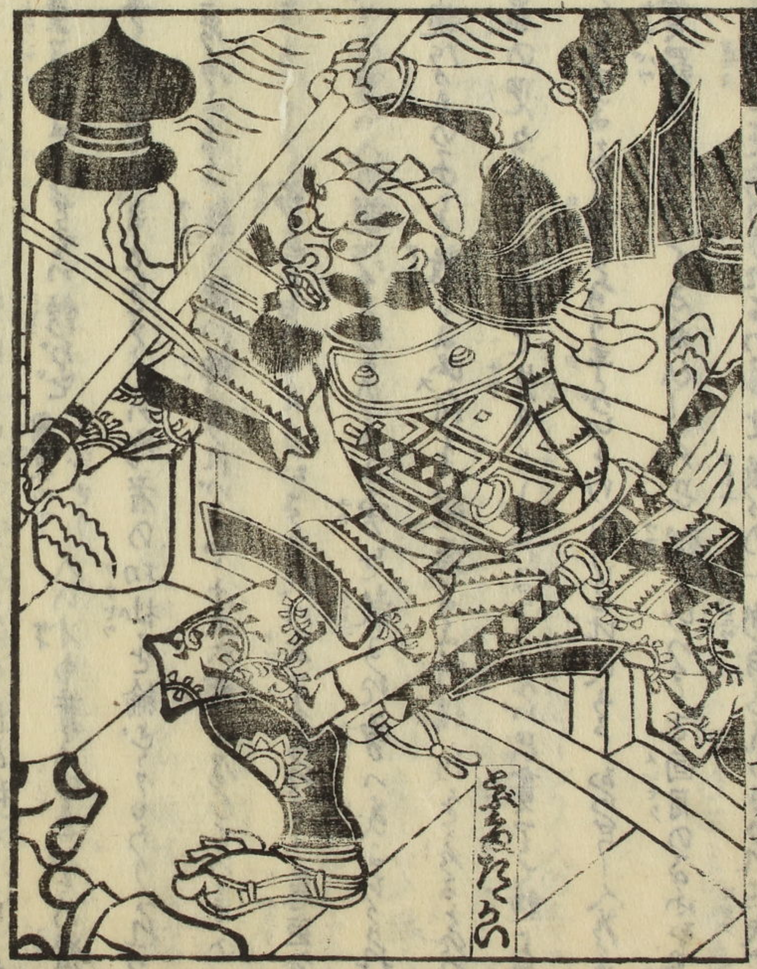
草紙の作者といふものの〻近藤清春狩川珠重富川吟雪が後画工の作者に筆眸を攬たりしを見る引書を種本と喚〳〵かべ今もむかしのごとく浪華の書肆いや写本と喚よたもの本とおもふ優多〳〵

○鹿嶋おどりといふものゝまりさく〳〵と指をおさへ猛者おうだ〳〵もう一人のそろ猫ん〳〵を肩とうたる時よ俄に立出もう〳〵鄙曲のうち歌舞伎役者の朝夷義秀よ扮とる和田が三男小林の朝夷たりさとうみりさも猛者よう〳〵朝夷とう猛さうのごと自誇もとそれいえ緑年間の歌舞伎役者中村傳九郎がちがめて鉦鼓よりしとる〳〵ひいうぐいすのうち朝夷よりぐたう猿若ホりさとうひ小林と称〳〵鶴の紋つきとそうるられよう小林が九郎が別構ひ被ふ役ありとそこぐもる藝の拙るえいものつうち超ありかるで比和泉此を夫が操狂言よ金平とう絵号をとりしるごとをとひあえとれがごのとうい畫

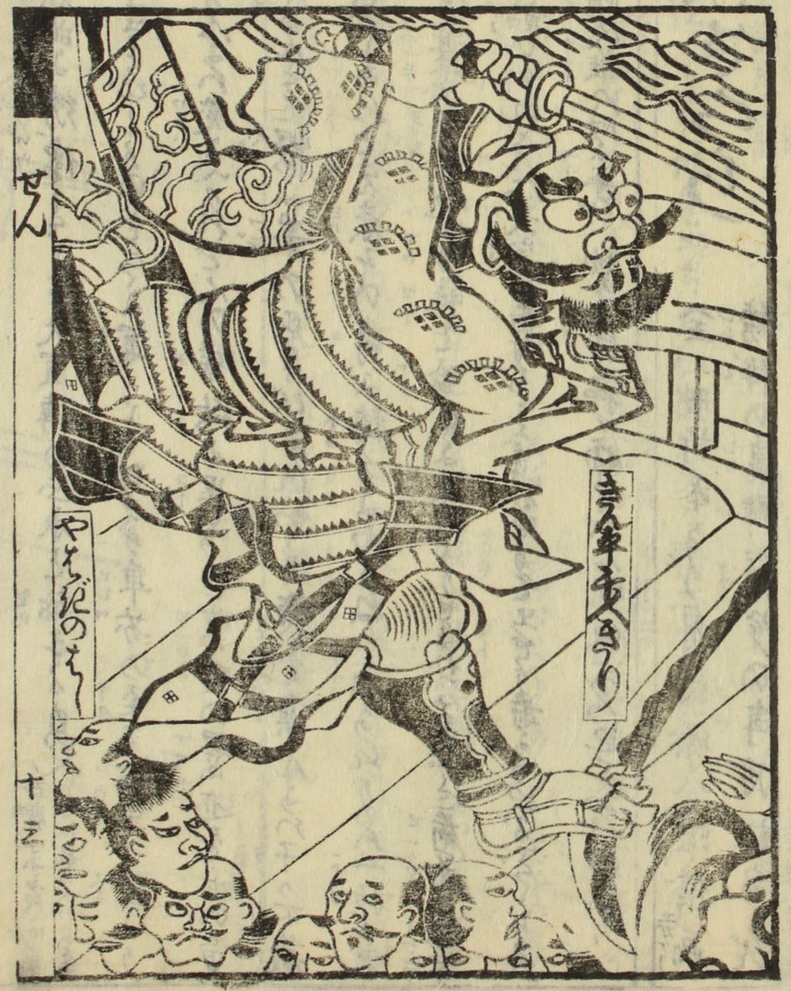
十七日顧勇気を好るより奥村源八政信が画たるそうひ猿なども繪本を今の童よホよそその鈔ごど圖説い下人の才も昔よ比もそその發よ生もり〳〵繪草紙などを見物数たりとうよう教る親い諫まれべうや十五六歳よりひとそい昔の愚直なり少年もいう〳〵労もうりおそうるもうりおそうるれい生さうちそうり愚直を愛さべられ昔いへの親たりのそのよ勇を教る紀勇い義よちられべうり今ふへの親たりのこを報るよ出利を競孟るよ所謂利をこねるとそ急〳〵貪頽の家の児うりそもう利を先もう〳〵られよそうそれ兵貪を飽と足ることを知ざべそのこを棄るより平ぶりとうりそれ兵剛臆を試こ賞罰をたぐ〳〵ちあひ〳〵うべ兵剣とうるを面目のそのふるえものぐうり物よ隣るとおりれらるを教うの一術るぐんうさられ元夫の勇いうーむるー

金平十人化里

全一冊凡一十六張綉像四張あり
事ところ著十二張より十三張まで



十二ノ二



十二

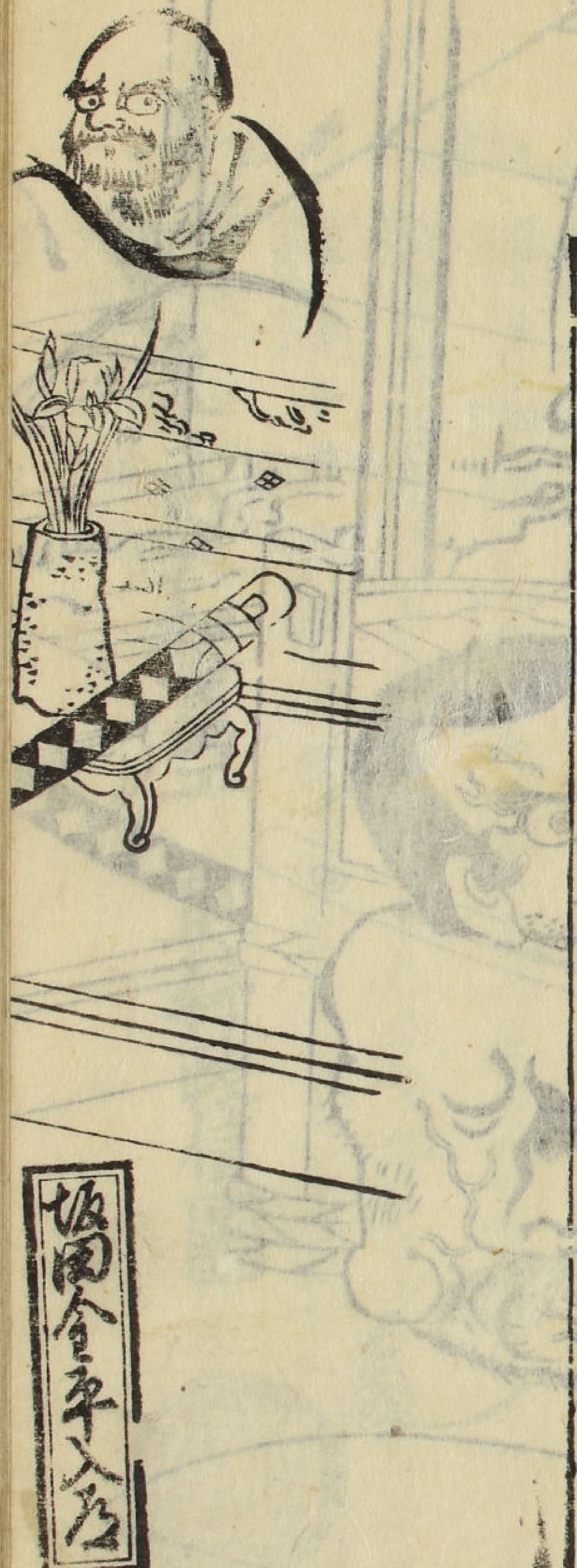
文禄四年辛未五月吉日
通り油町
井筒屋新板

○予が藏る所別に一本あり元禄十四年に刊布せるものにて事の趣
相似たり當初金平と題せる繪草紙數板あり今罕に得がたき泉
太夫が戯曲に綉像して太夫直傳の正本と称せるもの（古麗子が見る町戎や治和泉太夫刊行本矣）
めづらしきものをこゝに寫しとゞむるは卑芬の至りて好事にもこそあり
とそしる人もあるべけれど人の嗜欲も異なりし當時の景迹を世の童
子等に示さんとて慢に筆のすさびとなしける類を集めて予が所藏
なる古ぐしあれどもその奇に誇るにあらねば関なきものは一枚も載
せず凡て舊き臺必自ら土也曖昧を喩さんに卑くりせられんは前巻に臨寫
あぐる土偶飴の引れざんだ異室の番付もこゝに此むをすて出せる新きもあるすぐにちれ
世の筆の蹟又稚れ附に弄び　物を年を抑て嫁さびたればのとすなく記くあはれなり

さはひさら

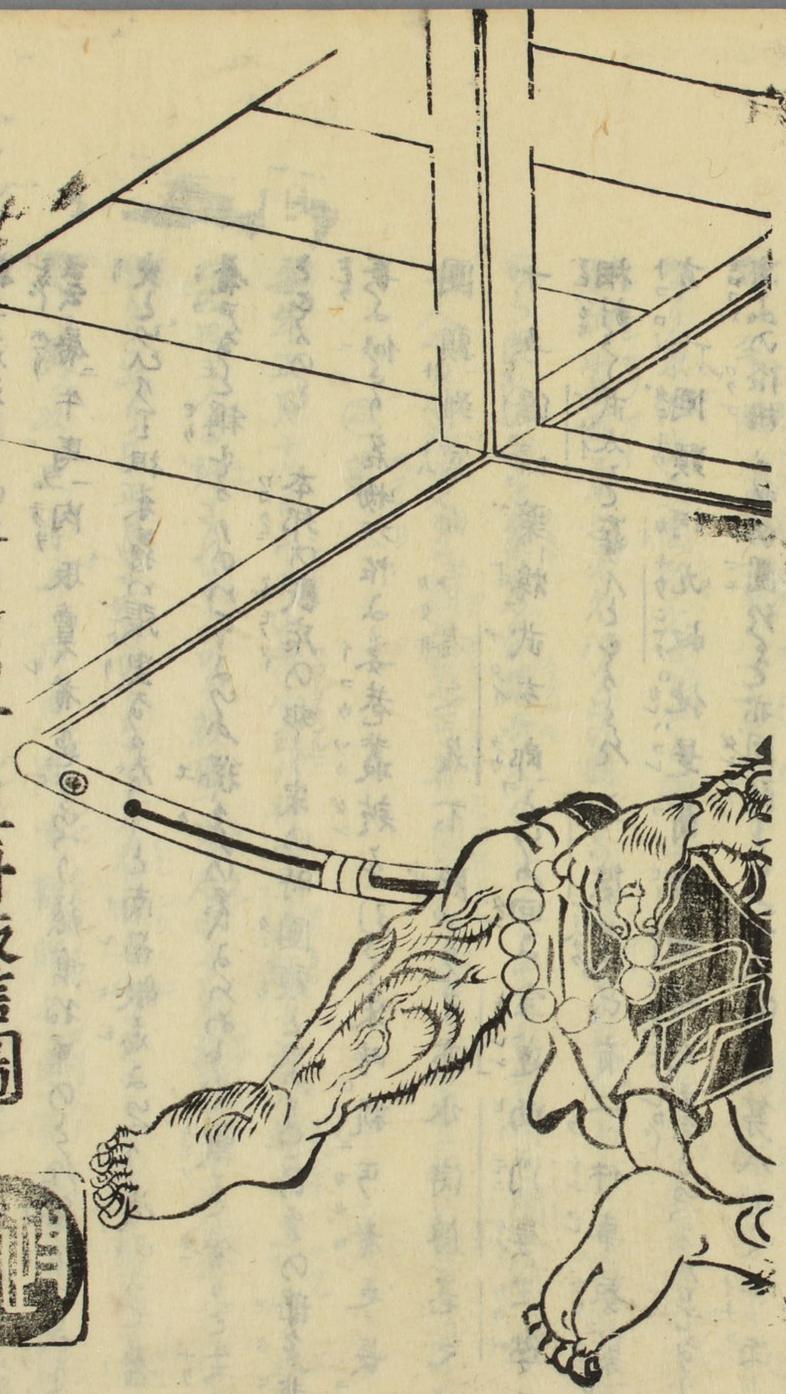
全一冊折本なり奥村源八政信画
綉梓の書肆發兌の年月詳ならず

しかし頼光朝臣に属したる平公時が一子に酒田金平といふものあり勇敢膂力
世に勝れたることを世に出ちの和泉太夫が脚本を鼻祖となされど此れ
名人にて膾炙して古今末生の金平が勇力親衡義秀などが上に出て今
ね牛蒡などにさへ彼が名を負したるものと怪むべからざるものやたゞ蓼
あるものゝ寶永年間の繪本にてさくら桜と題せし図する所の猛者と
なく十餘人あり門純なりしまゝに金平入道を巻尾となせり金平が禿髪
の図は画工の滑稽欲ならんそれとても當時の流行をもとめん



東武大和畫工

奥村政信圖



㊁ 團頭

鐵漿いろとりのまを畧しるを知る
云屠牛馬一肉取賣者也。
史とりひろを祖来翁い張里るべ
看戸るど稱するりのいてよりの猟
とそるのを　本邦の獣店の如〜宋の時團頭とりのこの方の猟多非人
長よ似そり名物六帖よ委巷叢談を引〜宋時。枕丐者之長曰
團頭。雖富而丐者之名、不除。とそえ水滸傳巻之二
十五。潘婦藥鴆武大郎とりの回よ金蓮西門慶王婆等
相對〜武太を葬んともろ〜王婆道。只有一件事要緊。地
方上團頭何九叔。他是箇精細的人云云とりるかそるりよ
書山の俗諺よ物の圖引をホ團頭とりるそ水滸傳第八回へ一面七
行半。團頭鐵漿護身物とりのようろ鐵の鍥鉸を打る首枕
るり東匯先生團頭をヨビロと訓ズ与二京師の丐見シその号旋人
備訓蒙圖彙よえたりその團の字よ暗合のようそその名井の名
ちう團頭の字を象るの頗奇るり
十人之日知錄ろ又團ハ聚ン丐者一團の次るれ字又ホ名おとおりこりおの意
㊂ 藪入

毎年正月十六日市井の老小或ハ神仏へ参詣〜或ハ郊外よ荘山〜奴婢い
この日主人よ許されて親里へ帰居そを藪入とりの今俗いられを宿
ちりとのり呂正月十六日のこのりぐ春秋二時よりをあり五雑俎よ齋魯
人。曩以正月十六日遊寺觀謂之走百病とりるよ相似たり
按ずるよ走百病とハ拝山〜元気を養〜百病を去らんりの義なるべし
本邦の藪入と唱りや本据辞ちりの本邦の藪入とハ全ク異え様以降條端の贅句よえたり

類栂子里居辨ず其角が云ずぶりを春のりとをや上下の人のびそぐろう
ニタくと盆後の悦びを約むくたり或古家西の判談ずやぶの植物ユ百去
養父入人倫なへのまい字去と俗せをられらん文字の上を信用してその経
ちくたくへの家くの奴婢僧僕下四名るまぐ年よ一度の暇をもも名風
乳風よ倒くくつしをはくめ作るまへ家盗宝の粧やよ御ことめをあらち
ぬをくよ本とそべく今の代へんの不その挽も改りくく春と秋二交父母そろち
うめるら類縁よまぐあへ花月艶容の気伸をく傘の洗濯ずごろつき
おのやちくようへの附ようくく端家その禁門を色る名里へりるを母ぶりと
いめるり女御ようど寝ねる破母ぶりとそろ名べく御ちれるりとへ人
三日五日ぐく日数を定めそのめのくもナめるうれが母ぶりかもるくやどいる
もちぶりるく雲上の飼いあちれるもりくたらめもたく月の詞いろるぐそ
数まあちをたを云云とへりとの親非うり主家の挽を破をく親里へるの

義ととそくろくその名月宛うく種うべ赤養父入と書ところの藪入の儀
字るれば文まよち父く鑿穿せんの参盖七暴ま早ず著くたる雛階歳時
説ま藪入の箱入の施るんと記せも張るれ嫁入りをよめりとまぐ母ぶ
をおりくものべく再接ぞるま数入ところ牡ム山の多七字ち玄赤有レ水曰レ澤。
無レ水曰レ藪トとのこを世俗の竹義のことを称ことくを私訓母ぶこ孫
生の義ぐくく竹朱花井ちがうべくま生たりを母ぶとのくま先達の説より
赤深右衛ろち集ま

人の家をうりをうへくまやもりくくくもものくちやれなり
ちびむらじ萩の母ぬをを意ーりれたうぶりがまれやとの注
それらくたるまもやぬたるものへたるものやるとうめるく草物るく萩茅
是竹ま限うべぐく草物うれ処を母ぬとち藤ありとへりうとれ

原野經よ逍遥をを薮入りこのひたらんよ蚊蝉ホが親里へ帰るも来門
うり白屋へみそのれがられをも薮へりとうるべしめられが唐山の探春
踏青の我みも精へり縣うり草ねりを薮入とひらんよ薮入
ろくび又越後名寄巻五。舊跡門。奥沼郡よ逃入村とのあり一名
を薮入村とひふうえたり。土俗の説よ小千谷のほとり山中村うを一里
許を隔て左大臣藤原時平公の墓あり大臣の餘流と稱するゆえ彼
村よおりより逃入村と唱へ一名薮の村とひふうを記せり土俗の説い信
ぶりよそらどこれいえ弘棄武うり兵乱うちつづて朝権を失ひたる貴人
のそらそうまでそそひたるその孫遠き花洛よりら大臣の餘流と
稱ぢうるてそんとそれめてれ貴人京師より逃きて村落よりの称
をそうそ後世逃入村と唱るゆえその古跡よりて分明し
そうれがらの村も薮入の一種とをべて天明辛酉俳諧師吾山が薮入や

宿そぐうの袂ちうんと喰ぢんうく薮入の称を辨たり子徳角のころ
端の連歌を嗜たりしが壮年よ及びて志ろうあふぐれのて度う廃ぢんと
そうのよ称えいふうくうれを好そのものの行ろその意よ悖らんとをそれて
黙止そうたくて寛政十年の秋第乙冬急よ俳諧蔵帋
を轉録てそその遠志を果ち後ハ更よ俳諧連歌のみを親ぢうし
今この筆記をうんそうよちめ其角が發句を辨て又詩歌の吉凶を験
ふその辨ごうびよ及べか類よ家ひん墓てくり世よあうてもそうそ
竹ごろ批評志ありうぐんとりめよ胸中ざうさあうそ涙忽地よそうり落草
さくうち湿ろうよせんとべうくて机りんゆり枕引、うこの夜い物もせぢうし

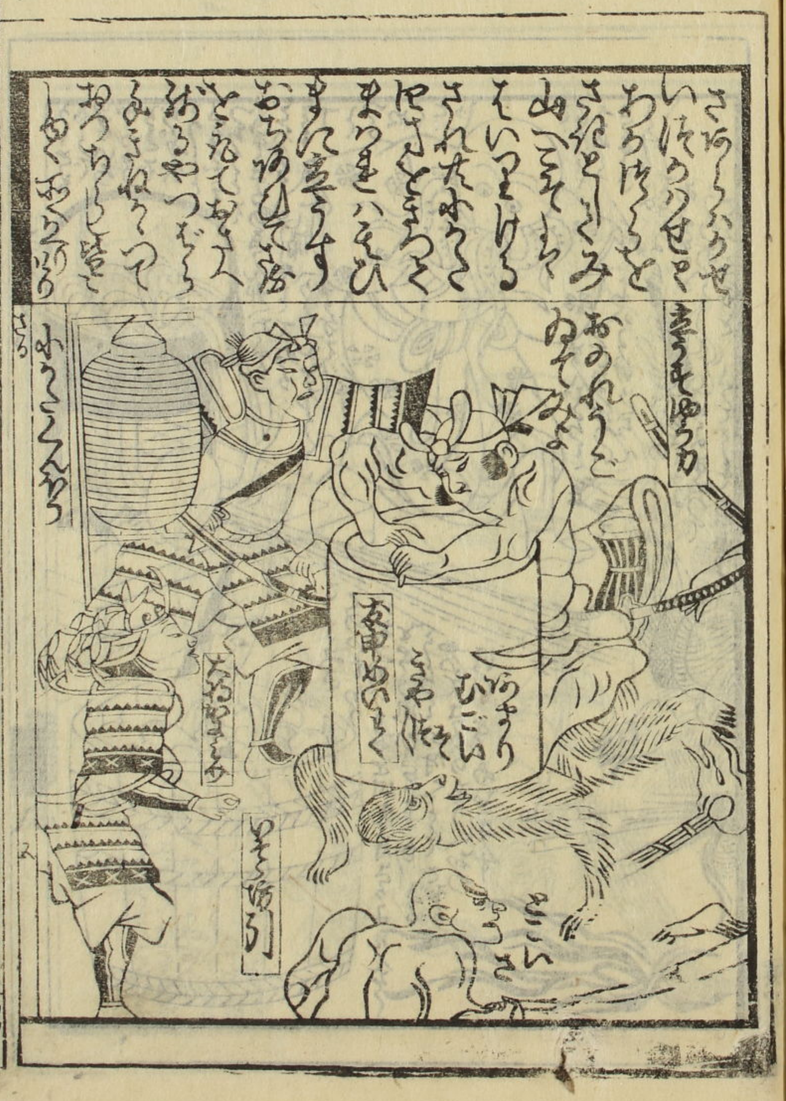
㊃ 猴蟹合戦

昔うり童蒙のそうる物語もあのづから根く知あうらひ出るもこそ往しも
窓友の暗譚よ換のあそらくい穿鑿附會の説妻あるべし

○猿と蟹と山榧を繞る事

猿かにをいろく利を急ようとするほどに柿の枝を易ようとするを蟹かをのれが飯と易ようとするを猿柿の枝を頒よければ立ちどころに芽を出してその樹数十八九丈に向上るがごとくなりて柿果數多なりて彼猿ここに柿をうち食ひて徐ろに蟹に報ゆるに甚だ辛くして逃入るその痩痛堪がたくして遂に起ること能はず蟹が親族妻子縁由を尋ねて且怒り且怨み寄集りて猿の軍兵を起して猿を責む猿も又戮の備をなして軍器を相接る折から臼杵蜂鶏卵等詰来て共に奇計を運らして忽ち猿王を穴居へ誘引きたるを蟹遮ぎ止めてその謀略おもむきを問ひ火着を取て埋火を掻起してまんとするに鶏卵が當べきもあらざれば蟹ども群たち来て數百の猿を夾てその穴を咬て欲ひあらすとふる事なり唐土の小説などにも蟹と猿と戦ひしに所見有り蟹と虎と闘ふ事あり李石續博物志云蝙蝠蜂の大者能く人を殺す亦蟹鉞云蝙蝠横出蟹貝無毛両螯八足後二足偏小大なる者長尺餘両螯至て強し八月能く虎と闘ふ虎不如遠て去れ蝙蝠退殼一退長山谷を塞ぐ楚辭云蝗臂美兮當車螳螂強兮當虎又蟹と山神と闘ひ勝負ありし事異聞記載せり近世有彼

臨(レイ)寶永中江戸書肆所刊行繪草紙猴蟹合戰(ノ)圖 第四張(ノ)上 洲(ノ)二九張(ニ)



この類(タグヒ)るものおほべしもろもろ舊板(キウバン)の繪草紙(ゑざうし)凡(すべ)て禄(ろく)う貞享(ぢやうきやう)永(えい)の間(あひだ)刊行(かんかう)をもとこれらの繪草紙(ゑざうし)書画(しよぐわ)を二度(にど)ほろび或(あるひ)は九龍(くりう)の稀妻(まれづま)形(かた)或(あるひ)は毘沙門(びしやもん)亀甲(きつかう)の華情紙(はなうすがみ)を標紙(ひやうし)とし負(おひ)たる中印行(ちうゐんかう)の猫(ねこ)ホぐしもの最(もつとも)小冊(せうさつ)なる

再板

さるかに合戦

下

全本一冊 所蔵
下巻也 第八段
油第九頁

宝暦明和の間再刻せるところの繪草紙桃太郎吾刀雀 兎大手柄花咲爺
浦嶋太郎ホの数本あり原是江戸大傳町書肆難波屋の藏版なりしを偷学町なる
書肆西村永壽堂うけ藏めて今あれ年くみ覚行せうて奇とするに足されバりしつ

勢一常一云。乘レ船ニ泛レ海徃二天竺國一者已六七度。其最後船
漂入二大海一。不レ知二幾千里一。至二一海島一。島中見二胡人一。衣レ革
葉一。懼而問レ之。胡云。昔與二同一行一。俱數十一人一。漂没。唯已隨レ
流得レ至レ於レ此。因爾採二木實草根一食レ之。得レ以不レ死。向一歸
哀哥。遂船載レ之。胡乃設レ饌。島上大一山。悉是車渠瑪瑙玻
瓈等諸貨。不レ可二勝數一。舟一人莫レ不二棄レ已賤一貨。取レ之。既滿
舟。胡令二速發一。山神若至必當懷惜。于レ是隨レ風挂レ帆。行
可二四十里一。遥見二峯上有一赤物一。如レ蛇。形。久之漸大。胡曰。
此レ山一神猪。實。来逐レ我。為レ之奈何。舟一人莫レ不二戰懼一。俄見
雨ノ山從レ海中一出。高數百丈。胡喜曰。此。兩ノ山ハ大蟹ノ螯ぬ。
其ノ蟹常好レ與二山神一鬪。山神ハ多ク不レ勝。甚懼。今其螯出。無
憂矣。大一蛇。尋至。蟹與二盤鬪一良久。蟒夾二蛇ノ頭一。死於水ノ上ニ
蛇ニ連一山一船一人因レ是得レ濟。又蟹と蚯蚓と戰ふのあり。頭陀物語一
曰支齋涼鬼祇園のうら行脚せしに一日杜山にて日暮く宿よからんと
さまよふ後方より物あり怪しとふりかへりみるに赤ひ丸き物の如くあるが風をおこして
動くとも飛ともなく宙よりおちるやうに近よる程よ涼鬼魂消て肌膚粟
のごく襟寒うするやうなくなんともうけられぬ一歩つゝ
あとさりするよりほかなし。忽地後方よ音一て氷さるゝと鳴ると共に大革颯と戦ぐよ
物の響ひゞくとすると思ふうちその物をうんぬ地よ一さしおろして
汗を絞る辛ごく人のあるよ
を研ぎすまして涼鬼が面よ一常あらぬ
さうにほう笑をそゝ世よものめづらし物よみゝどもの山の蚯蚓く蚯蚓山の土を
食ひて年を経ハ土気を起一そよ飛行を必ずよの如く雨霽一そらく

いくつともなく生ずる澤蟹と戦ひてこれを打つぶし脳を吸ふことを
西國より多かりその蚯蚓が怨みてたたるべし故にこゝに澤蟹ハをるべし
大サ三四尺その最巨なるに至てはいまだ餘まものぶりのあり甲の上のハ苔むし
て草木を生じ眼の光天を射螯を抗足を運して人を食ふなれども
あり蚯蚓ハ彼を打ほがして却人を済ふよし似たりとぞ
里蚯蚓のその虚実ハいまだ知らざれど蝉より巨大なるものありとぞ晴川云
玄中記に天下之大物。有北海之蟹焉。一螯能加於
山ノ上。身在水中。又山海経云。姑射ノ岡ノ大蟹在海ノ中。蓋
千里之蟹也。又女丑ニ有大蟹。廣千里と注ぜられ大蟹の他
物と闘の證ありあら虎ハ本邦まの如獣なれどもこれを猴に代たる欤猴
とをるハ因縁あり蟹銭云。眉公書蕉云。西方山中ニ有人焉。
其長尺餘。細身捕蝦蟹性不畏人。見人止宿喜依火
以テ炙蝦蟹。伺人不在而盗人籃ヨリ。以食」蝉ヲ。名曰山猿。甚
音自呼ブ。人常ニ以テ竹箸火ノ中ニ燃爆而山猿皆驚ク。犯レ之ヲ
人ヲ寒熱ヲ山猿ハ山都ノ属欤山都ハ猿ニ似テ最大ナリ性蟹ヲ
貪ルヲ食ふりのみならんや猴蟹ヒ怨ヲ結び且鶏卵爐中ニ在てこゞら
大ヲ爆燁ル猴ヲ驚せるよりのみならず相似ふう亦蟹縁ニ述異記ヲ引く宋のゲン
ふ山猿ヲ驚ス。ふよりのみならず相似ふう亦蟹縁ニ述異記ヲ引く宋のゲン
嘉の初富陽の人王子空駕漬ゆよ蟹簏ヲ作るよ山都その簏ヲ窃て蟹ヲ
盗るこゝろを載。その説前の山猿ニ似テ頗精細これを述異記ヲ参考ふる
ふれ則の本ハこれの本ハ疑ふ山都或山精ハ似る孫之騭云異苑云。
山精ハ如人。一足長三四尺。食山蟹。夜出晝藏とふりめれ
ば山猿山都ハ老猿狒々の属たり蟹の猴ヲ蟹と為ることいとよく根くるを
〇猴蟹合戦と題するの蟹緑云呂ノ俗有蝦蒄蠏亂之語。蓋

取レリ其ノ被ヒ堅執レ鋏ヲ歳或暴至則郷人用以為兵器ト也ト
ある国主る欲〇蟹が拾ひ得る飯を惜ぶらく猴を笑たる
集ニ朱登為東海相遺ニ敞蟹ノ嚢ヲ報書ヲ曰。蘧伯玉父ニ孔氏
之賜。必以及ニ郷人ニ敞謹ニ合ニ貶於三老ノ掌ル行者ニ曷敢獨
享レン之ヲ見ニ暗川ニ集ニ
とある趣よ似くり〇蟹が猴よ傷うるを及ぐく衆蠅皆
それを憐ぐ類ひを盡ぐく猴を責たる条ぐ蟹録ニ云ク。蔵園雑記云ク
松江沈宗正。毎深設ニ酌ヲ於塘ニ取レ蟹ヲ入レ饌ニ一日見ニ二ツ
蟹相ニ附而起ニ近ク視レバ之ヲ。一ノ蟹ハ蹺皆脱不レ能レ行ニ二ノ蟹卑
以テ過ニ新宗正ニ為メニ感嘆ス。遂ニ折レ蔚ヲ終レ身不ニ復食ハ蟹ヲ。董孔昭
曰。西ニ利生之喩レ友也。曰。第二ハ戒夫耳月。不レ能ハ及ニ手足ニ
不レ能ハ相代ニ在レ我ニ者且然矧伊人ニ乎義哉。斯蟹郭索乎。
縛ニ蕭之間謀ニ甚ノ身ニ不ン遺ニ其ノ夫ニ。
義ヲ仗ク鰲言ヲ斡ひくるの和漢よとれのりえ享釋書云。蟹ニ満ニ寺者ハ。在
山ニ別ニ久ニ世郡ニ有リ郡民一合ニ家慈ニ善奉ニ佛有レ女。七歳誦ニ法
華ヲ普門品ヲ数月而終ニ全ニ部ヲ一一月出ニ遊ス村ニ人捕レ蟹ヲ持去ル。
女ニ問フ。捕レ此何ニ為ス。答曰。充レ食ニ。女ガ曰。以レ蟹ヲ患レ我ガ家ニ有レ鼠。
相ニ報ニ酬。村ニ人與レ之。女得テ放ニ灯ノ中ニ。歸テ家ニ貶ニ乾ニ鼠甚ノ又耕
田ニ忡ニ。一ツノ蛇追ニ蝦ニ蟆而含レ之ヲ。父憐テ而不ニ意曰。汝捨ニ蝦ニ蟆ヲ
以レテ汝ヲ為レ塔ト。蛇聞レ言ヲ擧レ頭。見レ翁ヲ吐ニ蝦蟆ヲ而去ル。父歸テ舎思
念ス。語レ女ニ言ヲ。恐失ニ愛子ヲ懊ニ悩不レ食ハ。婦及女問テ曰。翁何ソ有ニ
憂ニ色ヲ而不レ食ハ。父告レ實ヲ。女ノ曰莫レ慮也。早ノ食ヘ。父悦テ受ク膳ヲ。
納ニ夜有リ叩レ門ヲ人ノ。女ノ曰。是レ蛇也。兵言ニ三日ノ後来レト。父聞レ門ヲ
有ニ女ニ冠ノ人ノ。曰ク。依レテ約ニ来ル。父
女語ル父ニ擇ニ良材ヲ。固造ニ小ニ室ヲ。室ニ成テ女ノ入テ内ニ閉ニ居ニ三日ノ後

冠一人果ニ未ダ見テ女ノ扉ニ居ル生ニ恣ニ一恨ノ心ヲ乃チ寝ニ本ノ枕ニ長数一丈ニ以テ身ヲ纏ヒ室ニ蟄シ尾ヲ蹙メ戸ニ入ル父母大ニ恐レ不レ得ニ争奈ンセン半夜ノ後叩声アリテ。息ノ聞ニ悲鳴ノ声ニ一頃刺悲ノ声又止ム。明旦又見レバ大ナル螃蟹百十。手一足乱離シ蛇モ又破レ蘆ニ百一餘一所ニ。并ニ皆一死ス。女悶レテ室ニ出ル。顔色不レ變ゼ。曰ク。我聞キ戸ノ外ニ大小ノ蟹千百ノ此ノ蛇ヲ。大ニ蟹ノ多ク歸ル。小蟹ノ死ス。今存ル者ハ。皆小ニ一蟹耳。然レドモ大ニ於テ孝ニ常ニ。我ニ通夜誦ニ普門品ニ一有リ。菩薩ニ長尺餘。誦テ我レ名ヲ一百遍ニ一蛇ノ就テ其ノ地ニ一覚レ寺ヲ薦ニ冥福ニ一故ニ号ニ大悦ノ便穿レ土ニ埋ニ衆蟹及ビ蛇ヲ一蟹満ニ寺ニ又曰ニ紙幡寺ニ一十八ニ一判官蟹ノ自称ヲ言ク。狄ガ五ヲ相継ギ病死ス。湖州ノ医生ノ母ノ多ク蟹ヲ食ヒ。而テ苦悩ヲ受ケ多ク李江ノ細民張生ノ蟹ヲ煮テ食ヒ。而テ之ヲ活業ト。殺ス処ノ蟹数千百。紹興五年七月ヨリ至テ其ノ家断絶スルヲ。

その家忽怪あり。張が女夢る。死し張夫婦も又死しその家断絶するを。

漢の王吉が夢ニ巨蟹ヲ。多ク司馬相如ガ文章ヲ。多ク天ヲ横行ラン。多ヲ。而テ多ク宋ノ鄒浩ガ蔡京ヨリ隔テラレ。昭州ニ謫セラレ。乱石ノ中ニ蟹一枚ヲ。多ク。之ヲ放テ。其ノ應報ヨリ。次ノ日赦サレテ。京ヨリ歸ル。多ヲ。宋ノ元嘉年間章安縣ノ人嘗テ虎ヲ屠リ。海ニ至リ大キナル蟹ヲ。煮テ。之ヲ食ヒ。而テ。その夜夢ニ。その蟹ヲ。多ク食ハントシ。而テ。その人明日悉ク傷ラレテ死シ。多ク亦順治八年ノ李冬百獅池ノ蟹枉死ノ。多ノ。屍ヲ。顕ハス。多ヲ。呉縣ノ進士蟹ヲ釣リ。解エノ兆トスル。多ノ唐ノ龍翔ノ初洛別景福寺ノ比丘尼ノ侍童伍五娘死シ。而テ。その生ルヽヤ死ス。寺中ヨリ。蟹ヲ食フヨウニテ。刀林地獄ヲ墮ツトヽ。而テ。その父母ヲ。憑テ。冥福ヲ求ム。多ヲ四的ノ城中ノ民徐生ガ婦蟹ヲ啗ヒ。而テ。その夫ヲ。憑テ。冥福ヲ求ム。多ヲ四的ノ城中ノ民徐生ガ婦蟹ヲ啗ヒ。而テ。その夫ヲ。憑テ。秋ヲ海濱ヨリ至リ。而テ。螃蟹ヲ啗ヒ。而テ。その夫ヲ。憑テ。秋ヲ海濱ヨリ至リ。而テ。螃蟹ヲ拾ヒ縄ヲ。

られを貧乏に推かゝるとそれい婦蟹を烹て飽ほどくらひその縄戸外
に積て置たり一日婦早く起て窗を推積たる縄の処をみれば数百
の蟹つどへり大に怒り叫て遂に病を受昨蟹そが多を繞てこれ
を殺と叫びて狂ひ死をたすくる人その処を螃蟹除と唱うてこゝ
に小説に述ところ載て類書ありこれ蟹の多く荅怨を報ひ
し故事に挙亦我関西の俗説に毒永の役に平族長門の赤間関屋嶋
檀浦に没てその寃魂化て怪をなせる蟹をいへり今も彼地に於
て眼口分明て甚だ勇士の怒るが如く名けて平家蟹とよの撰別大物
浦にもこの蟹あり漁人これを武文蟹とよの文撰別安里河にもこれあり土人
名けて嶋村蟹とよび相伝ふ正慶二年一宮親王の随身秦武文松浦枝
を縁られ御息所を奪去らる武文これを逐て大物浦に自殺し寃鬼風
濤を激て主を救ひ遂に化て蟹となる或いふ享禄四年細川高国
三好宗三と戦ふて敗走てその臣嶋村貴則苦戦て主を救ひ遂に去
里に没て化て蟹となるこの実いふ一種て唐山よりこれを関公蟹と
いふ蟹録所謂呉沈一氏子食て蟹毒を得背殻若悪一状者上有月口
鼻布明白常宝説をとりあげ平家武文嶋村が事寓言
と係るといへども亦是蟹の雄あるの証由未久〳〵立難如、載唐天寶間
魯一塗民劉成李一暉以巨一舫載レ魚有二大一魚一呼二阿孫陀仏一
俄テ萬一臭倶呼其一声動レ天ヲ晴川亦一云堅瓠瀆集云唐天
宝間宜城劉成舟中聞二蟹一呼一仏一云云ある怪談蟹のかひと妻り
○蜂をとらへ猴を刺ちの封侯の對るり又玲瓏山の強盗八十餘人京うり来
る水浪高人をひそびせんとて戮の蜂を刺まつ又法成寺の池のほとり
る蜂阿弥堂の簷よりる蜘蛛を刺てその支のおよ仇を報ひうち共く今昔
物語巻の三十の十四張うり十七張よりえたりとまつのをとひうちる歟○村

と曰が蟹を輔けりとのみ云ふ孫杓曰が名を家乗たる欤史記趙世家の趙卿が門客公孫杵曰その友程嬰とともに謀をめぐらし趙氏の孤武をたすけ輔終に仇人屠岸賈を滅せしことあり○右人獣をよく蟹を取る〻傳畧を述ぶるの末の陳造が長嘯傳清の孫之騏が旧鮮虫傳ホあり皆これが我俗の話柄とするの年を同じく語るべし

周亮工の蟹杯曰。甚ノ斗ノ大者。巨一名斗魁人或用以酌レ酒謂之蟹一極一ホ訶陵雲螺之流也。見二于晴川蟹録一後蟹録云。蟹杯以二金銀一為レ之。飲不レ得二甚多一必盡乃脱甚製甚巧。載二石屏詩。

怯ヲ。則雙螯鉗其臂一必盡乃脱甚製甚巧。載二石屏詩。

落一ホ三秋晩。黄花九一ニ催行當階勝レ餞。甚把蟹螯

杯ヲ。予曩ヨ若干ノ南詔ヨ寛永中京師の蟹姑吉師が蟹の杯を

圓一ルヿが再按ずるヨ彼杯の原来顔大初が蟹杯を摸一たるより

且その傳畧も悩あり。吉師が寛永二十年八月廿五日渡ス法号ヲ唱

玄院塑達旧性鷹峯壇上ヨ墓あり壇上の山門ハ吉師が建立たる

が後火ヨ係りて改建ヿり京のりける賀茂社

人のりその墓碑ハ其年慮橘菴墨一ヿられをおくられし与盃の辨

うれど卿曇篇の紀幷を補ふのミ

○伊豆の七嶋大嶋うり八丈よりるもぐ牛馬の外ヨ餘獣うり但蒐ハ醋

ヲ一とのり按ずるよられりの鳴鼠いミな蟹の化ヒり不ろべし晋書太

康四年會稽蜘蛛及蟹皆化レ鼠甚衆。復大ニ食レ稲為

災とのふのうえそうられを解蒐とのふも多数ヒ

小説よもられをヒり

○東坡蟹を嚼ヒ後漸その殺生を厭ふ〻復終ヨ食りべ又州の吏

黄羽うれを嚼ヒ東坡ヨ過ヒ後蟹録云。李笠翁平生嗜

蟹ヲ。以レ蟹為レ命。毎ニ干蟹ノ未レ出時。即儲レ銭以待。自呼ニ其

錢ニ曰ク買命錢ト

○蟹を食ふときは柿と荊芥と同く食ふべからず木香汁これを解と本草にみえたり亦蟹の毒に中られたるには大黄のむらさき紫蘇冬瓜汁凡蒜汁豉汁蘆根汁黒豆汁生藕汁皆その毒を解すべし晴川これを餘杭の呉世衡にきゝたるよし後蟹録にのせたり

(五)桃太郎

童話に昔老夫婦ありけり夫は薪を山に折婦は流に沿て衣を濯ふに桃実一ツ流れ来て携へかへりて夫に示すにその桃おのづから破て中より男児ありしかば此老夫婦原来子なかりしかば此桃中より出たる児を見て喜てこれを愛育しその名を桃太郎と呼ぶ或云老婆桃實二ツを拾ひて家に携へかへり夫婦これを食するに忽地に年若くなりて一ツの男子を孕みて生れたる児を桃太郎と名づけしとなりその児忽地に成長し膂力人に勝れて一郷に敵なし一日その母に黍團子をつくりてあたへられしが母その敵を問

よろしからぬちごかみのほどはそぐくとおもひたるに三尺ばかりなりなるほどはよろしかれどもなかなかになりぬれば髪あげなどさうして髪あげさせきちやうのうちよりも出さず云云この子いとおかしげなりぬれば名をば三室戸のいんべのあきたをよびてつけさせあきたなよ竹のかぐやひめとつけたり云云この餘竹節の中より人を生じたるは寶樓閣経をも引て沢社にもいひ華陽國志異苑志怪録幽怪録を引て竹取物語の註釈にもみえたりきこえたるそれを記さんに又橘果の中に物ありけり仙人ありしよし幽冥録ニ巴邛ノ人種ニ両大橘ヲ如シ二斗盎ノ剖テ之ヲ有リ二叟相對シテ象戯ス。一叟曰。橘中之樂不減商山ニ。但不得深根固蔕ヲ耳。一叟曰。僕飢矣。得龍脯食之。食訖以水潠之。化シテ一白龍ト而去るといへり

閩にいふ今ノ紀州の蜜柑その大きなるものは龍鬚といふ草をもてこれを

裹め橘仙髭鬚菜を食ぢとの故事よる欤

さんび桃果の中より児の生るゝと作るこれらの説よ因まるべし且その竹と橘とをのゝごと別よ桃實とするのの桃の仙家のそれ鬼精物を殺すの功あんぐべし加之流るゝ桃實を以て鬻鬼を退ぬる児を生禍を未然に防ぐうへ古事記所謂伊耶那岐命告桃子汝如レ助レ吾於葦原中國一所有。宇都志伎青人草之落苦瀕而。悪搤時可レ助レ告と宣ふるより亦晉陶淵明が桃花源記をはじめとする欤又述異記よ本國二有二金桃一。其實直一斤と云ふるも稱へて亦桃の鬼を退治するうへ本草綱目 巻二十九五果門。桃果下二云ク搗レ爾尸疰鬼疰急以桃一仁五十枚研泥水一煮。取二四升一服スヘ之。又傳尸。鬼氣桃一仁一両去レ皮尖。杵碎。水一升半。煮レ汁入レ米作レ粥。空心食レ之。又鬼疰。心一痛桃一仁一合燃研熨湯服スヘ之。

い鬼鳥は勉て寶を得んとして互に爭ふ父母これを忿とて各その一つを與ふ又重子既よそのいづれを務とられを務岡よ著父母よ辞別して各途よ大ありその極淵ある泰山をさしてとられ一つあるの後者たらんとの事よつて又猿と雉とよあつてこれある泰山をよて後者と遂て鬼場ホ郡をその處を責て鬼王を擒ふん鬼どもその歓ぐがそれをうえて三つの宝物隠蓑隠笠打出小槌を献ずて主の命をたち斬て桃を郎その寶を受て鬼王を殺し大猿雉ものを引て故郷よ帰をとのゝ事よ擬ぞらへ桃實の中より児の生れ出ると和漢よその故事あり述異記云西南夷傳曰云云。夜郎縣西南一百餘里よ遠夷國名也。甚先有リ女子一浣紱忽見二一節竹一流入ニ其中一有二號声一剖竹視レ之得二一男一。歸而雞レ之及レ長

有武畧。自立為夜郎侯。以竹為姓。漢武帝元鼎六年
征西南夷改為牂牁郡。夜郎侯迎降。天子賜以王印
綬。後平夷獠咸以竹王非血氣所生。乞為立廟今夜
郎縣有竹王神是也○又竹取物語にいはくむかし竹とりの翁と
いふものありけり野山に竹をとりつゝよろづのことにつかひけり名をばさるきの
のみやつことなんいひけるその中にもとひかる竹なん一すぢありけり
あやしがりてみるにつゝの中ひかりたりそれを見れば三寸ばかりなる人いとうつく
しうてゐたり翁いふやうわれ朝ごと夕ごとにみる竹の中におはするにてしるぬ
子になり給ふべき人なめりとて手にうちいれて家にもちて来ぬ妻の
姥にあづけてやしなはすうつくしき事かぎりなしいとをさなければ籠に入てやしなふ
竹とりの翁竹をとるに此子を見つけて後に竹とるに節をへだてゝよ
ごとにこがねある竹をみつくる事かさなりぬかくて翁やう

亦神桃。主治。殺百鬼精物。本經殺精魅五毒不祥
中惡腹痛。又桃花下云。氣味苦平無毒。主治殺疰惡
鬼。令人好顏色悦澤人面（瑠璃類書云神農經云梟桃在樹不落殺百鬼 桃王服之長生不老といふ…老夫婦桃）（果を食かく忽老を與復弱なりとそいへり）又桃葉下云。氣味苦平無毒。主治除邪
鬼。中惡腹痛。又天行疫癘常以東行桃枝煎湯浴
之。佳とみえたり又日本紀神代紀。伊弉諾尊自黄泉走
還時雷等皆起追来。時道邊有大桃樹。故伊弉諾尊
隱其樹下因採其實以擲雷者。雷等皆退去矣。此用
桃避鬼之縁也。云云又この時桃に名を賜ふて意富迦牟都夫美
命とのたまひしよし古事記上代本紀第十三巻にみえたり又風俗通に東海
度朔山（度索或作）有大桃樹盤屈三千里。下有鬱壘神荼。以
食凶鬼。名曰播桃とありこれらの故事によりて桃太郎鬼嶋へ到て

暴を殺〳〵その惡王を擒ふたるあり〇又桃を啣ませ請ん泰の雷を遊ぶし糧よ裹そ〳〵旨途ちるまも又本据あり孔子家語見篇

云ク。孔子侍ニ坐於魯哀公一。設レ桃具レ黍。哀公曰。請用仲尼先ツ飯レ黍而後嘗レ桃。左ー右皆掩レ口而笑。公曰。黍者非レ飯レ之也。以雪レ桃也。仲尼對曰。丘知レ之矣。夫黍者五穀之長也。祭ニ先ー王一以テス爲レ上。盛ー草布レ六而桃爲レ下。祭ニ先ー王一不レ得レ入ニ於廟一。五穀之長ー雪ニ果蓏之下ー是レ侵レ上忽レ下也。ゆゑに桃を啣ませ請ん泰の雷を遊ぶし糧よ裹そ〳〵旨途ちるまも又按ずるに拾芥抄に巻の末り八種唐果子〳〵題〳〵楊枝桃子餢飳桂心柿腝餲饠団子ホの見ゆれば桃が雷よの名目よ〳〵ゆるると久〳〵又彼桃を郎が雷よを齎して穀と〇桃よ大も赤緣故あり李至が桃花大〳〵歌云

宮ー中ニ有レ大桃ー花。名。縫殿寮ニ掌レ之。

敵の城を抜たるあり畑時能〳〵を凝〳〵たる太平記よ云畑六郎左衛門時能

とやもる武藏國の住人なり〳〵あり〳〵人を眤を気健よ〳〵が祺巧あり〳〵

撓ざりれば戰場よ臨ぞよ敵を癈り堅ん當らじとのみすれば物ハ類をん繋るゆゑれが彼が甥よ所太夫房快舜とそ〳〵も有らざる

惡僧あり又中間よ惡八郎とそ〳〵訣言る大力あり又犬獅子〳〵とゐをつけたる不思議の犬一疋有〳〵り此三人のりのごも聞よぐよなれば或ハ鬪くみ勝よ

擽を著ー足捉よ出立時もあり或ハ大盤よセッ物持時もあり樣〳〵賢人智

敵の向陣よ忍へ先ッ件の犬を先立ー城の周りの樣を伺ふよ敵の用

心密〳〵て隙を伺ひ〳〵れ時ハこの犬一吠そ〳〵ち出敵の寢入夜廻も止とゐ

竟出〳〵まよ向ー尾を振ー告り〳〵ば二人共よこの犬を案内者よ〳〵

扉を乘越城の中へ〳〵叫喚ぐ縦横よ礙よ切ー廻り〳〵ば數

手の敵軍駭騒て味を落されぬのうち見下巻ノ二十二〇又雉を後者とあざりるゆゑ名雉を擬したる歟舊事本紀云高皇産霊尊勅二
肉テモノ緒ノ神等一曰。昔遣天雉彦於葦原中國一。至レ今所以久不レ来者。蓋是國神有二強禦之一者。我亦遣二何神一。問二天雉
彦一。逗留之所レ由也。思兼神諸神答曰。可レ遣二無名雉一。乃雉亦鳩一同遣無名雉與鳩。而往就之。此雉亦鳩降来見二粟
田豆田一則留而不レ返。所レ謂雉頓使。亦豆見落入鳩是レ
其ノ縁矣。さるゆゑ雉の栗田をえんで留まる彼泰雲なるめでたりと
ゆゑり雉ハ瑞鳥也その端桃を郎ゞが寶を得て富と至るの前象とえ易
離為レ雉傳云雉賦云。稟二離之正気一應二朱火禎祥一云云。
雉ハ南方火ノ象〇鬼嶋ハ鬼門を表ぢうらんを逆とする西方申酉戌狄
ゝてとうらん狄四時ゟ配ぢうゟ西ハ狄ぢうゟ金気殺伐狄主ゞゆゑ

その意ゝと深く且鬼嶋ハ南嶋の總名ぢうらの条ゟ雉の鬼嶋へ到て功ある
うらをのう猪確頸書云。雉ノ雄者ハ有レ冠。長一尾文一采善一鬪〇
挨の人ゟ後ひ一ゟハ和漢その例歟ゆゑねび毛拳ゟ遣ぢうぞ〇桃を郎ぞ
鬼嶋へ到て寶貨をえたらうゆゑ為朝の事を擬ーていゝ保元物語
為朝鬼嶋渡りの條ゟ御曹司ハ西國ぢう船ゟ組調練ぢうんたり船を
も損ぢうぞ押上て見給へば長一丈餘ある大童の髪ハ空様ゟ取あげたるが身
まつひと生て色黒く牛の如くなるが刀を右ゟ指ぢうまく出ぢうり云云
ホ云実ゟもゐんば鳥穴ゟ〜その鳥の勢ハ鵜程ゝ為朝それをうんあひて
件の大嶋ゟ〜ホゟ有を射落〜空を翔るを射殺〜ぢうぞ〜ハ嶋の
ものどもこれを振てもぢうぞ忍る汝等も我ゟ後ゟぞハもの如く射殺さぢ〜と
雖へぶ皆平伏ぢう後ひりり身ゟ著る物ハ網の如くなる太布ゝとの布を面ゝ
の表ぢうまく持出ぢう前ゟ積置ぢうり島の名を問へば鬼が嶋ゝと

(六) 香切雀

香切雀は、笠を被り、笠の縁を逆さまに被り、逆さまに被ることもあれば、別に出処あるものもあれども、笠を被ることは同じ。

笠を着て蓑を着、笠の縁と対して温古録に大歳の夜、隠蓑と隠笠とを着れば明年ある人吉凶を知り行くという物語さへ出来るくらい（隠蓑隠笠は夫木集巻三十二雑、十四信實朝臣「ゆゆしき世のうち時の」

綿巻物せよ行きてこれを擬しそめる物語さへ出来るくらい（隠蓑隠笠は夫木集巻三十二雑、十四信實朝臣「ゆゆしき世のうち時の」

七嶋知行これを八丈嶋のりさ嶋云云これ永萬元年三月のこと

そのつぎ桃を鼠が鬼嶋渡りに全く（一つ欠）

蓑うれ名をやとりつもり（一つ欠）よ鬼をたくる者うれがさの鬼の蓑笠ぞ

笠をこの鬼よ比べくらみのうち又回回雑記に道真淮后へ蓑笠の裏

（相別綴沢近辺へ）あめがくたす神のたまひしくだりを

その笠の蔵これ素盞烏尊の故事

一書説素盞嗚尊結束青草以為笠蓑而。宿一夜神

云云。乃葉集巻十二。久堅乃雨零日乎我門爾蓑笠不

蒙而来布人也誰〇鬼の笠をかるるそ日本紀。齊明天

皇六年。秋七月甲午朔。丁巳。天皇崩于朝倉宮。八月

甲子朔。太子奉レ柩還至二磐瀬宮一。是夕於二朝倉

山上一有レ鬼著二大笠一臨レ視喪儀。云云鬼のかれ笠とかのこと

うりのふるべくさを笠あれば安ぐ隠蓑と対でもや温古録に大歳の夜

笠よ着て蓑を逆さまに被ること逆さまに被ることもあれども

笠をこのみもあれが別に出処あるものもあれども

童ラホが説ところ大うさ本文とあるで故くところ拳ぐとそのをとて異うの
処わかに辨ぜざる
宇治拾遺物語巻之二云〻今は昔ある僧ありけり年つもりて日曩うのりてうよ六十ばかり
其のありさまが生うちとりくおこなひけるよ庭よ薄のよいありけるよ童子を
ぢりくうちたれがおくりて猿をうちをられよりり羽を拗とめりくさぐよ
彩よ鳥のうけをありたれがあるよむうくと取てんとくく此女のそだてとりて
ひたちけるとくて物どもを小桶よのをとく夜かもさむぬれが来くせ剋せるよ
こそびてこのせうどもれがまどもも孫るどあられ女るぐくをて薄のうるくとてよ
くを笑ふあくく月比うくはくらいるぐくあるこおりく薄のむよもめ中!
ひひりをみしく思ひりありさるよ物くりくとても人よ此をぐそんくよ
物どもセのどのひかれたれがまよどまられのんでう薄のうをとくくみくこ笑
こどもさられとをくられがとくく剋ぐよ郭ほどよりより今あるよ鳥よ

とられどとく外よ物くまよをえくく猿ぐとくくさげたりられがぶの
あるとと主子の取女をぬくの月ところ暮れがあるあぬれが物どもをのくのく
あるれや郭くのあるよ又為ぐをとられんるどはれくにあるくひられが人くの
笑れりさ女日ありくあり此女のおくるうよ薄のうくるく声あられが薄
こをいうくるくれありしぜあのよるうやあくんとどのそ歩くられがの薄の
あのれよ忘れぜまくるとそあられとのありぐに女の顔をちちえくになり
雲ぐくるの物を落しくるくぬ郭くのぬ女打よるあくんぜぐめの
あるくくのねる為られがとくくそれがひさぐのくをどひとう薬くく
かれくうりて猿よあるよくとそあぐあるよ持たりあるのみぐ薄の物よるく宝よ
ああよとくるよるも笑へがとられ猿くくんとくうたれが杉よるりたり
りみぐくちほくひろぐくるくて女うろこ
びひびぐくと隣の人もちをせられぐもくつをもせぐちりあり笑もくでぐる

もゝをあけうれ食(クヒ)くゝ果(ハテ)もあとまでぐれて大ぐる
セッパうそのさごごもちんとおひてゝ肉よ
ほそほけゝかたりさて時こうく
今ふうくうりぬらんとそゝうれがようくうり
みりうらをあうそゝくちあそんともも
ぶすてゝあり〳〵母〳〵ろんども切(サヒ)あけそゝうれが物(モノ)ひと物と入たり何ようる
らんとうんゝそゝうれが白米(シラヨネ)のようそゝおおぎとおうさりうり蕎麦(ハヘ)のそう
えるをうんゝたゝよおすで出(イデ)よ入(イレ)でゝあれがたぐごとまんあうさりうり蕎麦のそう
まうそとおさまゝくうれゝゝうれが物よふんれ
ちすでもうよひくゝあり出をうんゝしゝ
たのゝゝた人まごをりうるそうりの里(ガト)の人もうんあざそひうぐ出るよちみそけ出
との隣(トナリ)よりうる女のまごものゝ母ちゝ
ゝれるもえおひうで給(タベ)ねうどのうれ
さうもゝくとんうるりしまで蕎麦(スバメ)のそうごうあのはけどようくうるそ

しゝうまのなごとんごひそごのたゝをおそ
あるもゝうぬを院(ナホ)おうのもようう物くよのうえとそうそう
みうごとおうくゝおうゝ猫(コヒ)をれたる雀のめ巳をおん生(イケ)たうゝをうれゝとおひける
まやひうごこのうまを一ッうちくまうりうるうとんがそうの
たも出一ッうぐとうくがそれよひうる米るとうおうぐぜんまのもあら
ぐさうよおるうんちうをまぐとそくとうせれぐうれもりうぐ掘折(コンヲレ)たる雀(スゞメ)うひて
おうんとおひうり同をたそくうれど猫(コヒ)をれたる雀鬼(スゞメサラ)よえそごつとめこそよ伺
それがそごのおとよ米のちりたるを雀(スゞメ)ありうぐりありくを云をうう
ヲゝとそうそがあうごの中よたびくうう
おうぐびてうりて猫(ヨヒ)うく打折(ウチヲ)まそくうれて泊とぐ悠
一ッが徳(トク)をだよそうれちそくまうごうぶうよなりありんあのとうりの女よ
おまうそうくまごもよ泊あられんとうぬ入ごとの用よ米ゃ死ごうあびおうれ

雀どもの下りて食(クヒ)ふまされが父うち〳〵しゐれが云うち折(ヲリ)ね今いかゝもあり
さゝあらんとおひさ〳〵猶折(コレヲリ)る雀(スヾメ)二斗桶(ヨツ)よさり入(イレ)〳〵綱(調ノカ)とそびさ〳〵つゝさゝのど
さゝ云ふ雀ある程よこるらくさりくさりれが悦(ヨロコ)びて飛(トヒ)ことろ
それみるぬいぎ程ぎ考つとろの雀い猶うち折られ月ごろあれたろのの根
たりとおひりさ七十日ぎをおりそのの雀どもまされが悦(コヒ)びとさびけの物でさゝえ
たるとろるひことのさまを一ツづゝみな落(オト)〳〵おされがとうれ〳〵とそとり
さゝとところ種(ハヘ)くさり生(オヒ)たちて〳〵みな〳〵大(キ)よなりた雀
老いひとおくもあらど七ツ八ツぞるの笑(ヱミ)向(ムカ)てまどもよりあ雀う
ちろ〳〵ほさもの雀ども我(ワレ)かとるりの女ごまさりさんとこゝげよさ
もあらうんとおひてさりされい数(カズ)の米ちくさんとさく人よもこゝせ
ぎされもこゝぎごもがら〳〵隣(トナリ)の女房の里(サト)よりの人よもこゝそされもぐひ
うどさをちぐ老いまさく三ツが程ぐ雀ども入(イレ)てもこゝさりとおひさ

さゝまさおひさ〳〵近(チカ)ぎさりの人うもこゝせられもてめ雀もりうこともよこでんそ
あ何ちめさゝうみよにげ雀物よもこゝ似(ニヨ)ぎ雀(黄蜨)ごさりさのさりまさ〳〵死(コヒ)ぬうど
食(クヒ)とおひる父(ヂヽ)〳〵もさりぐもされも物つさ〳〵ちぐの程よさりの人ごもこゝ
ぬそんぐ〳〵米(ヰネ)のつまさてこゝいさる物をこゝせぎるおそ老(ヲユ)雀でめさ
けみんのこちよりうる物をこゝせぎるおそ老(ヲユ)雀でめさ
ひちさめんとおひさ〳〵おんがぬ〳〵の女をこぢめさ〳〵る雀もこゝ物ぬぼえどぎれ
ちぢして物ちりあひたりふぐひさ〳〵てめ二三日も過(スギ)ねんがたれ〳〵もめ(コヽヲ)る
ほりたり女ごの米(ヰネ)こゝ米(ヰネ)さるんさ〳〵いる物をひそぐ〳〵ごぎ雀
ありるるめり二おひさ〳〵残(ノコ)さのをぐるつりぼさ〳〵おさりさて月ごろ老
今ぬよくさりぬちんとそうつ〳〵のまんぬ桶(ヨケ)どもぐ〳〵ちやよ入(イレ)うまつれば
歯(ハ)もの入れにしく〳〵耳のりとちぐひとさ
蜂 蜈蚣 石龍子 蚯蚓
そちむぐでさりぐ〳〵桶(ニケ)をさせてうつ〳〵れがあが宝(メ)

さらごも女ひとりもあぼえど兵の子ぞ
をこ〜ぞこゝろんとの七ツハッのひさごうり
らひ女をぐさ〜ころ〜ころり雀の擒をうち折られ
虫どもをわさらひとくひこうりるとうとる雀ハ
べりしをサるひけたれがうれ〜と思ひるりされば物うら事こいせまじ死こと
うの全 出手第十六條又雀の粒ぐらとの小鐘書
諸島の吊ふうをあけそれ神代紀よ天雅彦の死〜と記し鳥を以仕事せ〜とある
思うそ作る歌一数ふ約当内給の作と
ちりぐれの御時の内作ものやたぐねぐ〜 めい今れ童どもいとこ〜作をうへたると
うのり腹ころ老女のめらひ安みはけんとこ〜盥のうちくあたりる粒をその
隣うる女房のくひたりし雀の嘗たれがうち腹たちこ〜みしとこ〜雀の舌を切て
そうの母をぬとの〜里宿切られたる雀のいそらそ〜邦がをめうんめくいとの物
語ると拉〜さゝ〜勝の女房こがむたる雀あやうちこ〜舌を切られたりと
時こ〜あそこ〜悲〜と思ひこ〜夫こも雀のもくを忘うんとこ野とも

うぐ山ともいひぐみもぐみ粒よとうしこ〜雀の棲処さぐもあそこ〜
雀の主ひりる夫婦のたぐもまこ〜ひしらぐ母こ〜家のうちへ誘引の是こ草
巣情ろ〜をりる処悦びまえ泊さろるなどまそこ〜よなぐそるこ〜
やの雀ぐもうもどの雀ぐもよ的をとこ〜
うぐをぐをこ〜終日りそうへけらひこてぐり回られうんとる行よ今いかう
ありゃうそうんとの雀ぐら二ツ出〜こ〜ありた舌をやとりあのうたをや
まおうとぐぐと向よ吾御老たをぐ員へこ〜ゃろるよりこと便ろうそれ
ろうたをあうぐんとへぐさんとそ物ろうれがられせよあ
う〜夫婦新よう〜をこ〜ろうまあけてうんとこ〜この萬籠をあけてうんれぐ
金銀珠玉巻絡などあもうこあをやうこ〜とひてられどこも
なんぐもつ死もやどたちゃうそのへ富こ〜なめりれへるりりかあ
雀の舌さりる老婆これをやこ〜こうぐ隣の女房う

雀の捿をたづみみちさぐらのまうどう 向定めくまれも徳ほうんとく
たづみてのぬ雀又蔦蘿二ツを出ゐてこのめうえをやる
もぐれと倒よりて蔦蘿ハそれうどよ寶も数ほゆくありぬべしとゆひて
ありんめさをめうんとくせるひて伽るよ石うどおひたるまうえ降
も退ぐされどめうじ心ものがいまたこれぐうち
うりとうどぐくした鬼ども殺ゐどり出ぐきを女をうらひ殺ーたりとうり
勉氏を蔦蘿ま伽をめへたるうのもめうどそ飢るどそ
人をたづめうをも雀の捿ゐたづをゆめくそのりそうまめくとうりもうり
まうたをこの字振拾遺ようんたる雀の物ぐうり根ぐ〳〵おりくく善をも
ゐめ悪を懲うん意もま婦くてそうちうるどよりのも世ま放を人
のある赤ゐるをうくく貴ゐのありへよ放さをんとくうりたるのを
殺をう雀の捿をうう折くまうひ生くそうちたるが如〳〵されど徒

放ゐとのふりのものれうんゐれば罪ゐるさへくれどうま
を寛徳うとありへたづり字治亜相ハ楊寶が故事をくきて雀
の物ぐうを伽をめへるるどくく捜神記云ク弘農ノ楊寶年九歳
成。朝ニ去暮ニ還。一ノ黄雀為ニ鴟梟所ニ搏墜ニ地ニ又為ニ蟻所
困寶愍ミそ取ー歸置ニ巾箱ノ中ニ。栄ニ黄花飼之百餘日羽毛
至ニ華ー陰山ニ兒ニ一ノ黄ー雀。為ニ
拝ニ曰。我王母ノ使ー者ニ蒙ニ君ガ拯ー済ヒヲ。今當ニ使ー南海ニ不レ得ニ復ー来ル
以ニ白ー環四ー枚ヲ與レ寶ニ曰。令ニ君ガ子孫潔白位登ニ三公ニ
此ノ環ー纏ー繞シ以下係ニ于ニ寶生ニ震震生ニ
果應ニ白環之ー兆ニ。ぐれ古切雀の根本ゑ又今の歌ゑ伎ようそうる雀ゐ
ぐうとうのうれも根〳〵和あそ周ノ成ー王ノ六ー年。貝ー交ー國人。獻ニ翫雀ー
周ー公命返レそうそうる述異記ゑ名ぐ唐の玄宗の時交馬あそる

是夷狄の獻ずるところその馬節よくあり舞よく舞う（天宝遺事参考巻一）かれが馬も雀も教えざる踏りのみならず又よく故しんを雀躍と称するような書に云故事に喜勝曰レ不レ勝雀躍一出荘子註如雀之跳躍とのう是彼どもこうよく雀などとの戯を作すらん雛より雞が雀いう人よ朝ろくろの夫木集雑部九土御門内大臣（巻廿七）

祝の御ことほぎ申すとぞ也時の富貴

（七）花咲翁

童話に云老夫婦慈悲をもて貧と

ほりくその処を掘るくろがね黄金の出ぞるく嬉び物賜ものよろこびうち腹なて

犬を殺し道次なるふ松のもと埋たりしその松俄よろこるるの翁これを臼

に挽て麥のごと舂よ麥の底ものるよ盡ることなく隣のをと

とくれを羨み彼臼を借りて麥を舂よ麥の粹けく虫のまじりぬるを

ぴりくと臼を打こぼつて薪のたき翁亦彼臼の疵をとりて枯木よ花を開し

隣の翁のごと金銀衣裳のどのもの恩賞のをて花咲の翁と名さる隣の

をとこ又これを羨み彼灰をもらひ枯木よ花を咲せんとて樹よ登

ぬるよ花いとぐその灰隣の家の眼中よのよれが後者ども女をもら

ずよるとの死よりてまどよいうち懲らせび忽ち犬を傷られ血よ染ぬ辛ど

迎てもてるを妻もうる女ともうりをよ

聚殺させのちと悦び翁よ近くうる

彼犬を借りく大路を引あるくよ跳くてとうとうびた

夫ハながく病ありて遂ニむなしくなりたりとなん
この故ありも物うらみをするものを誡るよしなれバ前の雀の事よりさらひ
あつめ種々の草紙のうちにも是彼とえらびとりて一條の物語ニ綴り
侍る須臾犬の恩ニ報ひしことハ郡司が妻の蚕の事を継てあつむ 今ハ昔
物語 巻二 十三ニ云 今ハむかし参河国の郡司妻を娶りてふたりニ蠶飼
らせて糸おほくとりけるに其妻が蠶のいかなる事にや皆死にけれバ夫ニも
うとまれて夫もはなれにけれバ家も貧しく人もなくなりぬ 妻ハ従
者二人ばかりになりて心ほそくなりて有けるに蚕一ッ桑の葉をくう
けるをみつけて是をやしなひけるに此蚕大きになりけれバ一ッを
ひたすら何ならんと思へども年ごろ養ひけるものにて三四年あまえて繭ざりしに
あはれなりけり この家にありける犬をかひけるがこの蚕の物のふぐみへて
桑の葉をくはせてやしなひて蚕を食けり蚕一ッの家ニ犬をうちとらんべく
まかくねど蚕一ツだに飼ひかざる宿世なりけりとあはれにかなしくて犬ニむかひ
てみれバ此犬あくむかひたる鼻の穴より白き糸の二すぢ一寸ばかり
さし出たり あやしくおもひて其の糸をとりてひけバ長く出るを籰ニ巻ければ
まきほどくる糸出るをくり出けれバ二三百の籰ニ巻
ぬれどもつきもせねバ桶どもにまく四五千両ばかり巻とりて後糸ハつきけれバ
犬ハたふれて死にけりと云云 この犬の鼻の穴より糸を生じたりといふを取て犬の
跡を掘りて金銀を得又その犬を埋たりけるほとりの松を臼にして麦を搗
又その臼を焼たる灰をとりて枯樹ニ花をさかせ国の守の恩賞にあづかりし翁
がこと作り出したる犬の精の松にのりたるといふ故事ハなけれど枸杞の精の狗ニ化
したることあれバこれより思ひよせたる欤 夷堅続志 徐仙不知何代人
嘗于落郷郭西山間煉薬有一黄犬 回旋于丹鼎之
傍 往還率以為常 仙人輒異之 翌日 以紅線繋其頸視

真所之至。桐陵岸枸杞蘞中。隠而不見。但餘紅線在。
即掘枸杞蘞乃得根蘞如黄犬狀特歸蒸之。芬香
滿室。仙家食之。錄此仙一去。類書〇犬の精の入りたる松の灰を
もて枯木を花を咲せうの所見なり。呉の朱休が犬梅花の發をこそ
とその家の玄を示せしこと述異記に云。呉太皇時。朱休之家
犬吠曰。言我不能吠聽我吠梅花。今年故復可明年
當奈何。遂殺其犬。明年休家人並死。第十九張〇枯木も復
春くさのうへの楊柳観音のまよりその放光法華経薬艸喩品に我
為如来両足之尊。出于世間猶如大雲。充潤一切枯
穢衆生云云。又梁高僧傳釋法雲。姓周氏。陽羨人。云云。
嘗一日講散花感天花逐風而下。如雪滿空。而延于堂内。云云。
續一齊諧記京兆人。晨興見兄第三人。所分財所居堂前
有紫荊一株。華甚繁茂。共議破而為三。待明截之。忽
然樹即枯死。真見之驚諸弟曰。樹本同株當分折
悽悴況人兄弟。孔懐而可離。是人不如樹木也。
相感而更合。樹隨復活。亦應人兄弟三人。所分財所居堂前
乱盞典酒幸林中枯松復生枝葉蕊蒨宛若新植
者。后蕭宗平内難重興唐。枯松再生。祥不誣矣。亦王
世貞列仙全傳。延祥観枯槐一株。丘處機以杖遠而
擲之。此槐生実。及今繁茂云云。これら枯る木の更に茂り或ハ天
より花のあまるるやうをのべて大木集巻之二十九後二位行成卿へ理本のかれたる枝
も花さかせ昔よりうるはしく咲れるもちらでうるはしきのみなることこそ〇と
ありそのことこそ血よ塗よりもうるはしく咲るを妻女をもつよりうるはしく紅の衣ありてもよりも
ことこれ〳〵ひとしうるはしき福富の草紙とのの繪巻物のかりしよりも仏

咲ちらすが花咲の翁は福とその翁を忌ひける故〇犬へよくその主を守る
ものく和漢故事毛挙に遑あらず賀茂社百首のうち慈鎮和尚の哥に
さもの人のうへなるあはれにもおもはれぬぬの物を志りぬ逆げに犬へよく主の恩
を志りものと人の上へ勝まりやかとれけや

八 兎大手柄

童話云昔田夫のとし老たるが山田耕をありけるに妻の嫗餉を送りけるに
狸これを窃らひつ翁腹立てかまくその狸を生捕て家に牽めて
ぬ置て梁につりあげたりさて妻の嫗よこのものの狸を羹にて食ふべし
とてのへるにうが此ものを待あるとなひて亦草野に出る嫗麦を舂て歌をうたへバ
狸哀れくあのが命ざよ助あらば代りて麦を舂んといふに不便なれば索をと
きてはなちそはざる狸忽に嫗を喰らひてその宍を羹にしてかくて化て嫗に
なりて翁の草野より帰るを待て彼羹を喰らんとする狸本の形をあらはし

嫗食の翁に竈下なる骨を見て笑ひ外の方へ走り出て先
よろべきへ箸を擲嫗が骨なる泣をうがりけるにかの山より
兎ありて翁がかたへ来り啼哭声をききて訪ひ吾済嫗の仇を報ひ
てんやう豆を熬ありとて熬しけれを翁より山へとて出くり
狸その香によりきたりければ豆一握ばかり得させるとぞ兎ははかりたる
よありし向なる山までに柴を負ていかばとらへがとても宜かるべしと言
その豆を得させねとせられけれど柴を負して後よとである
なる柴を負しられを先へたてその燧をとりてうち出て
狸その音を怪みれは何ぞと問へばあちこち山よりと答ふその火をや柴へ
燃つきたりければ狸又問兎とかんばうく山なと答ふる程に火は燃ひろごりて
狸の背を焼ければいたく叫びて堪へ難くまろび辛じて落ちた
兎又味噌に蕃椒をすりまぜたるを膏薬なりとて背をぬらし火傷の薬

るりて賣けて狸ハ背を焼爛されて
そひて背の火傷ハはげさもいとゞ爛たる瘡ハ蕃椒を塗附られほそりて
痛とのみべくものゝそら轉び狂ひて泣をめがをるハさも甘めうを狂
て狸の火傷愈たハ鬼又舩を造る狸られをんとくその舩ハ何ものと思ふ奥
ちんとそとそと欺べ狸うらみおくとも
されハ土もて造らんとて土舩を造りて鬼りともて澳のうへへ滿ひぐさ
狸の舩沈て忽水も弱るを鬼ハ機をとゝのへてられを殺して
ずよ媼の讐を復ひ〳〵との事
挟もて抱朴子ニ。山中ニ卯ノ日ニ。稱丈人者鬼也と。
鬼を田翁のあとよりの欤〇亦田翁の狸を主拘しとのみの韓子ニ曰。
ま一人有耕者一田中ニ株。兎走觸レ之ニ折頸而死。因失レ耕
事莫再獲兎。為宋國所笑とゝのみ兎を狸ちてその兎を
が友よ作をあたるをゝ〳〵〇狸ハ媼を義ふつゝ
い唐山よゝ例ありのハ我君子國の風俗の慈善よりて人肉を屠り或
い臨ちて或ハ義ちゝ〳〵働〳〵子孫を殆ちて史記齊ノ太公世家。
正義ニ曰。管仲曰。願君遠易牙烹其
子ヲ。以快寡人。尚可レ疑耶。云〳〵又黥布列傳ニ曰。漢誅梁
王彭越醢之。盛ニ其醢ヲ徧賜諸侯ニ。至淮南ニ王方獵。
見レ醢ヲ固大ニ恐。又殷本紀注ニ。正義ニ曰。帝王世紀ニ曰。紂囚
文王ヲ。文王そ長子曰伯邑考。質於殷ニ為紂御。紂烹為
羹ニ賜文王ニ曰。聖人當不レ食ニ其子羹ヲ。文王食レ之。紂曰誰
謂ニ西伯聖者ヲ。食ニ其子羹ヲ尚不レ知也。又衛人臨ノ子路ノ醢ニ
之ヲ孔子ニ。とのゝ說も紂ゝとゝ同日の談ニ
もとれどもその田翁ゝ剔脛めゝとのゝ說ハ蓋ゝ故事ゝ考經列

傳ニ云ク。蔡邕字伯喈。陳留圉人也。性篤孝母常滯病三年。邕自非寒暑節變未嘗解襟帶。不寢寐者七旬。母卒廬冢側。動靜以禮。有兎馴擾其室。鄰人以邕孝感所致。又作田翁が妻の喪を吊ふその家より馬を借りしとの事の類相似たり。○さて月卿の白兎藥を搗ふの說は猿蟹の說より根ざし兎謀りて火傷の膏薬を賣と作り出せり傳云擬天問。月中何有。有白兎擣藥。古詩採取神藥奉上。陛下一一玉一枡。陶潛讀山海經。兎縛高き山端白兎擣。蝦蟇先奉張讓傳靈帝作番車遊兎苑。後漢書張讓傳ニ云ク。帝ノ作番車ハ後漢ノ曲筒車ノ類ニ非ス。寒暑節變未嘗解襟帶。不寢寐者七旬。母卒廬冢側。動靜以禮。有兎馴擾其室。鄰人以孝感所致。又作田翁が妻の喪を吊ふその家より馬を借りしとの事の類相似たり。○さて月卿の白兎藥を搗ふの說は猿蟹の說より根ざし兎謀りて火傷の膏薬を賣と作り出せり傳云擬天問。月中何有。有白兎擣藥。古詩採取神藥奉上。陛下一一玉一枡。陶潛讀山海經。兎縛高き山端白兎擣。蝦蟇先奉張讓傳靈帝作番車遊兎苑。後漢書張讓傳ニ云ク。帝ノ作番車ハ後漢ノ曲筒車ノ類ニ非ス。

石一姓洒道之費云云。番車ハ水氣を上へ引上るものゝ如く得ふ水氣を上へ引上るものゝ如く得ふ石一姓洒道之費云云。番車ハ水氣を上へ引上るものゝ如く得ふ水氣を上へ引上るものゝ如く得ふ

且石一勒傳莊一平一令師歡。上ニ黒キ兎ヲ曰。云云。兎ハ陰一精。云ハ水ヨリ也。今黒兎見。水一德之祥也。ゆゑに兎が狸と水戰して勝をうると且石一勒傳莊一平一令師歡。上ニ黒キ兎ヲ曰。云云。兎ハ陰一精。云ハ水ヨリ也。今黒兎見。水一德之祥也。ゆゑに兎が狸と水戰して勝をうると

いふのいみ徒を兎とするり又瑞一應一圖ニ。王者恩加ニ耆老一則白兎見。續一漢一書ニ云ク。光武時類一書ニ云ク。滄州有リ流永渠。金一石皆浮。例一人以ニ兎一鉄為一船ノ類ニ非ス。

いふのいみ徒を兎とするり又瑞一應一圖ニ。王者恩加ニ耆老一則白兎見。續一漢一書ニ云ク。光武時類一書ニ云ク。滄州有リ流永渠。金一石皆浮。例一人以ニ兎一鉄為一船ノ

とあるべし夫木集ニ兎多くうち物ゝとありて異本にはほうち私のうちてうち方ぞ悪しゝ」とあるべし夫木集ニ兎多くうち物ゝとありて異本にはほうち私のうちてうち方ぞ悪しゝ」と為家卿の歌ゝとの土舟が松見ゆるやうに續一確類書ニ云ク。舟一師名ニ黄一頭一郎一以ニ土一搖一水一故名ニ為為家卿の歌ゝとの土舟が松見ゆるやうに續一確類書ニ云ク。舟一師名ニ黄一頭一郎一以ニ土一搖一水一故名ニ為

ふの狸が土舟を造るとて作りたる土舟ゝとの事ゆゑ兎の舟を造るとて作りたる土舟ゝとの事ゆゑ兎の舟を造るとて作りたる土舟ゝとの事ゆゑ兎の舟を造るとて作りたる土舟ゝとの事ゆゑ兎の

雜太郡ニ岑とゝ山ゟ彈ニ之郎ゝとの老狸あり其の妖ふり一里ゟ山中ゟ雜太郡ニ岑とゝ山ゟ彈ニ之郎ゝとの老狸あり其の妖ふり一里ゟ山中ゟ

勝ゝ山土舟の林ゟど喞ゟ山来あり土俗の說ゟもゝ兎ゟ謀れたる狸ゟ彼勝ゝ山土舟の林ゟど喞ゟ山来あり土俗の說ゟもゝ兎ゟ謀れたる狸ゟ彼

彈ニ之郎ゝ親うとゝゐ仕へたるう曇ゟ彼地ゟ去れたる友人曳尾菴ゟ彈ニ之郎ゝ親うとゝゐ仕へたるう曇ゟ彼地ゟ去れたる友人曳尾菴ゟ

ときゝ附會の說ゟり證とするゟ延ゟど彈ニ之郎ゝ次の巻ゟゟゝ

ときゝ附會の說ゟり證とするゟ延ゟど彈ニ之郎ゝ次の巻ゟゟゝ

○狸の腹鼓へはるくうをつゝしむ夫木集雑四寂蓮法師へ人もうた鐘も
音てぬるまる狸のこゝろそ侘ぐさうちけれ

追考巻之一十二獣の段ゟ兎をうと唱ふる十二支ニ限ル事を歎ふう
とのこと続とのゝ「ことば」が再按ぞるゟ申葉ゟ至十二支の唱をうけて
うの兎うのけるご考ゟ體ふるゟく旅たる歌ふまんどうのゟうふの
字豆末とゟん花をうの花とゟん白くて兎の毛ゟ似ふれが此名ある故裏表
物ゟ流波花と書たるも白兎波をまるのゟゟ兎の花ゟり個へを
を工畧ふくことのゟ唱ふるゟ十二支の外ふゟご考證をゟどゟぬべし

㊈猴猴の生態

古へ猴の膽の奏を聞ふゟ亀を嶋山へ遣ふ猴ゟ鏡ふ見剱へ殊ゟ入本ゟりふる海蛇その謀を偏ゟ祝ふ猴の偽ふふゟ膽ふ乾ふゟ嶋山ふる林ふあゟ放ふゟ亡ぬへきゟとのゟ本文ふ祖庭事苑ふえへ此一猿ふ予近属ある物ゟ引ふゟゟ頸をゟそゟ出ゟ祖一庭事苑ニ云ゝ。本一行經ニ云ゝ。我ト虬ニ有リ婦。懐ー蛭ニメ思リ猿ー猴心ヲ食。夫言。此ノ事甚難。我居於海ー猿ハ在リ山。汝且容忍。我當ニ求レ之。時ニ虬即チ出テ于岸ニ。見ニ一ノ猿ー在リ大樹ノ上ニ。即以善言ヲ尉ー問結為ニ交友。我當將レ汝ヲ度ニ海。彼ノ岸ニ別ニ有テ大ー林。花ー果豊ー饒。汝可ニ下ー来騎レ我カ背ノ上ニ猿ハ心ニ無レ定ノ故ニ即チ依ニ虬ノ言ニ。俱ニ没ニ於水ニ。虬即チ報ニ言ス我ガ婦ハ懐ー蛭ニ思ニ食ニ汝ガ心ヲ。故ニ将ニ汝ヲ来レ。猿ー猴即チ雖レ虬言ヲ。汝何不ニ豫

説。我心留於沙羅樹上。不持将行。善友還回放我取
心得已却来。於是虬復水岸。猕猴努力跳上大樹。
虬見猴不下。而語之言。善友汝速下来同至我家。
猴説偽言。汝虬計校雖能寛而汝心智慮甚拙劣。汝
但審諦自思忖。一切衆類誰無心。虬六度経作鼈見三十巻上
云今童の説ところ大なるたがごとく虬を驚とするものか六度経のごとく
海蛇が機密を備えとものか蛇足の説のごとくなりとも世俗生膽をいぶさも
と喩く某朝の用るところ活るがごとく物の膽をとらざれば必験なりとあり
醫その仁術なりのごとく残毒の和約をもとより生が生熟と戮すがごとく初
見る人死生人とのみも熟ざるの義と疫癘の方書を生人往来なることと一
あるをもとめあらんかぎり水地黄を熟地黄とあるを生地黄を対してのごとく生宮を
キと続ける生涸生蔵するごとくの物を一滴もまざるごとくのキも

又生熟の生なるおもわれば生膽の乾枯とぞるりをいふをも一世俗のいふところ
説の絶て多書よろことなり

㊉浦嶋子

昔なる童子の話柄とするる浦嶋が玉手箱とふるの陶淵明が
あらざるのみの今接ざるの世なるの浦嶋が玉手箱とふるのの陶淵明が
搜神後記よそ。袁相根碩等がみを附會ふるなるん陶淵が本文
云腕囊とふるの腕をまくり嚢を箱とふくまた根碩とあるを
ふるのくんや西の廣袤美の頭に又命を玉の緒とふくが魂出亜の美歌古書
うそ玉匣とふるくまくまるよ辨ぜよ

搜神後記云。會稽縣民。袁相根碩二人獵経深山
童嶺莫見一群山羊六七頭。逐之経一石橋莫狹
而峻。峯去根等亦隨渡向絶嵓堀正赤壁立。石曰赤

嫩上ニ有レ水流ル。ハ廣ク狹如レ一匹布。劍人請之瀑布ノ半徑有二山ヲ穴一如レ門。豁然而過既ニ入レ内ニ甚平敞。草木皆喬。有一ノ小屋。二女子住甚中ニ年齒十五六。容色甚美。喬言衣名裳珠。一名□□。見二一八至一忻然云。早望汝未遂為ニ室家一。忽二女出行云。復有得堪者往慶之。曳領於絕巖上ニ行琅琅然。二人思歸。漸去。歸路一女追遂。已知テ乃謂曰。自可レ去。乃以一ノ臂囊與根等語曰。慎勿レ開。囊如ノ蓮花ノ一重。於是乃歸。後出行。家人開レ視甚囊。囊一ノ小青鳥飛去。根還知レ此悵然而已。後根於ニ田中耕。家依レ常餉之。見在ラ田中不レ動。就視有ノ殼如ニ蟬脫。見于卷一第三條

とうりてく玉も箱いれもてらんさいの古物もの玉重ありもらんと続ひ

乃裏巻十一問答歌 作者ハ師不詳 級子ハ

宿ニ。吾甚悔ル。玉匣いおくるとの枕詞とのうく浦嶋がこを緑ど

るよめうねども玉匣をタマクシゲと読證とゝもろ後の草紙浦嶋子の

の縁 まつあるを箱とくるを玉箱の名ありふ脱囊の義欤又巾箱の

ホー箱ハ者盛手拭之器也 俗云ふ乱匣ト

嶋が子の事夢野の鹿のあるごとく兄ハ智をもてく量るに此ハ實事ともおもへ

りてへも今も人いひ新奇を好むが世の習俗と彼ら傳られ記をもてく文を

飾るともよゝべく古事記雄畧天皇の條の浦嶋ごのくだりの日本紀

雄畧紀云。二十二年。云云。秋七月丹後國。餘社郡管川ノ

人水江浦嶋子。乘レ舟而釣。遂得大龜便化為レ女。於是

浦嶋子感以為レ婦相逐入レ海。到蓬萊山。歴観仙衆。語

在二別巻一と記されしいへ史の後よ其もとりのうれびうらん日本紀へ

元暦天皇の艱苦四年よ勅して後撰せしめ給ふ續紀ふえ舎人親王
清儒とこれを撰集しゐのと中仲麻呂日本紀の説参考とすべし
ども天長二年の後ちぐハ浦嶋がその往きを誰うたらんゆゑまゐて後
ここそ雄略天皇二十二年秋七月のごとくこの世人もちれるあり
雄略の御宇よ當時の史を作らしめ浦嶋がその事を載らざるよ
かゝん欤らアゝゝ聖武孝謙の御宇うを嵯峨淳和の御時ぞ
ちぐ遣唐使をたてられ本邦の人彼へ物學びよりもの多し彼
哀相根碩の寄託寓言を伝へ當時の話柄ごとを日本後紀よ記載らる後よ雄略紀よ追書せられる
ごとむしろ今更よ管見をめぐらし元慮よ測りかたきのゆゑ耳を信じざるも
のゝ疑ひを述ぢを博物の君子よ向べ
敢事敬云。淳和天皇御宇。天長二年乙巳。丹後国余
佐郡人。水江浦嶋子。此ノ事雄略天皇二十二年秋七月丙午朔己酉
没物皆不昔円山川相遷人居成淵于時浦嶋子。独乗小舟
四方訪三神山。無覩蓬壺。但有一老嫗。浦嶋子向云。汝
何郷人乎。亦知吾根元哉。老嫗答曰。吾生此郷而百
有七年矣。不知敢君事。但吾祖父伝云。昔水江浦嶋
子。好釣遊海。永不還。経百歳云。浦嶋子闇
此語即雖欲還神女処。敢無覩。于時幕神女。開彼所
乗之玉匣。紫雲出後匣。起上指西飛去。但浦嶋子辞
郷之後経二百年還故郷甚容顔昔幼童云云曲亭云我
不解云云。朝臣中臣文人
訓点不備不得已也。

一此事浦嶋子傳云。雄略天皇二十二年。水江浦嶋子。
独乗舟釣於蓬山之下。眠於舟中之間。霊亀変化。

忽作美女。玉顏之艶。南威之美見予戦慄。
賛之閑西施掩面而無色。眉如初月出峨眉山露似
落星流於天漢水縦一無浦
翡翠未翔。浦嶋子一本無浦字
問云。神女有何因縁。而化来哉。
何處為居。誰人為祖。神女云。妾是蓬莱山之女也。不
免之金庭長生之玉殿妾処父母兄弟在彼
蓬莱之
闕。妾在昔世結夫婦之義。而我成天仙。生蓬莱宮之
中。子作地仙。遥於澄江之波上。今感宿昔之因。
俗境之縁也。宜向蓬莱
嶋子喋諾。随神女之語。須臾之間向於蓬莱山。於是神
女與嶋子携到蓬莱宮。而令嶋子入於門外。神女先
入於父母。而後共入仙宮。神女衣香襲穢。似春風
之芙蓉。百和香飄一本作飄声錯錯。如秋調之龍萬籟響嶋子
為漁父。唯為釣翁而志気一本作志気高尚。凌雲耦新
仙。閑徙其宮之為一琳金一精玉一芙敷丹一墀之内。瑶
珠珊瑚満於玄圃之表。清沈之浪仏。芙蓉剖而發
栄玄泉之涯頭蘭菊含咲不凋嶋子與神女共入玉
房薫風吹寶帳而羅綺一本作綺羅添香翡翠簟寒而翠嵐
巻蓬芙蓉惟閑而素日射堤朝服金一丹石一髄暮飲玉
漿一日瓊漿一本作環漿九一先芝一草駐老之方百一節
萬蒲延齢之術。神女一本神女作妾非容顔累年枯槁。逐
知外雖成仙宮之遊宴而内生旧郷之戀慕。宜
放一郷尋訪舊里。嶋子答曰。久侍仙洞之莚常嘗霊薬
之味。何非楽哉。抑神女為天仙。余為地仙。

隨レ命進退豈得レ違レ旨哉。神女與二送玉一匣一裹二以五綵之錦一繡一織以スニ萬端之金一玉一誡一鳴一子一云。若欲レ見二再一逢之期一
莫レ開二玉匣之織一言訖□
自ヲ歸一去忽以テ到ニ故鄉澄ノ江ノ浦ニ。
うれへ後紀の数をうけく張文成が遊仙嵐を擬ふる迎喜の比の文
人の述作欤或ハ兼顕卿筆ゑとり尋ぬるの扶桑略記
ゑも載たる故事終ゑ紀さるゝ事と異なりと雖も本紀の事朝臣の立里歩多
ゆゑとのゝみあり水鏡もおなじく扱ひたれば其の書ゑ亀ゑるべし
萬葉集巻九。詠二水江浦嶋子一首。并短一歌 作者不レ詳
春日之。霞時ニ。墨吉之岸ニ出居而。釣船之。得レ魚良
布見者。古之。事曽所念。水江ノ之。浦嶋児之。堅魚釣。鯛

鈎矜。及七日。家ニ毛不レ来而。海界乎。過而榜行ニ。
若之。神之女ニ。邂逅ニ。伊許藝趨而。相語良比。言成之
賀婆。加吉結。常代ニ至。洛若ノ。神之宮乃内隔之。細有
殿ニ。携二入居而。老日不レ為。死不レ為而。永世ニ。有
家留物乎。世間之。愚人之。吾妹兒ニ。告而語久。須臾
者。家歸而。父母ニ。事毛告良比。如明日。吾者来南登。
言家ニ。妹之。答久。常世邊ニ。復反来而。如今。将相
跡奈良婆。此筥。開勿勤常。曽己良久。堅目師事乎
墨吉ニ。還来而。家見。跡。宅毛見金手。里見跡。里之見
金ニ。在常。所許ニ念久。後家出而二歳之間ニ。嬬毛
無。家。滅目八跡。此筥乎。開而見手者。如本来。家者将
有登。玉筥。小披ニ。向雲之。自箱出而。常世邊棚引去

者。
五巻。叶紬振。反側。足受利四管。頸。情失奴。若有
之。皮毛皺奴。黒有之。鬢毛白斑奴。由奈由奈彼。乞
侍絶而。後遂壽死祁流水江之浦嶋子之。家地見。

反歌

常世邊可住物乎。劒刀。己之柄於曽也曼君。

皇后宮大夫俊成

里ならび浦嶋がまいめるとも親姑射の山をとぢめるべし

夫木集雑部 堂塵百首中、浦嶋子

ことよろづよもめぐらね浦嶋やさくみのそのの波よらばなど

ゆる故事いめりとしく損るくなりとろく益もあらじ言を極くその虚実
を論ぢんい風雅の本意よそむくむ似られど大あらこころ分くもあるべき
ず歌陶潜が桃花源記陳翰が槐宮記張文成が遊仙窟記ものもいふる

鹿山の浦嶋がまいめるを中世俗いは
くく式部卿橘朝臣奈川の驛ある西蓮寺よ浦嶋を祢が塚と唱る
りの事よ縁起一冊あを中葉事を好りの細引ある浦よこれを祭よ
るよりや御門朽あるる大平権現の化神源を勇つを奉れよりも類
なるべし

その餘鼠の隠里い述異記よ出ると
紙草紙い寛永のころ既よ行れしも弟の革紙のう中山三柳老人の醒睡
随筆上巻 十九張よんえ出をめる類の物語い皆繪巻物よりありるを後よ
枠よのがせりうん彼繪巻物と唱るい繪合の餘彼なる源氏物語絵
合の巻のうちへぐくしと物るくくをあるれど鎌倉右大臣いとしりの
盡ありれ繰倉右大臣いとしりの陸奥前後の古戦の画
鳩を弄ぬそよ東鑑よえ亦同書よ建暦二年十一月八日於御所

繪合のくさ〴〵その白廣え献賢の繪の小野小町一期盛衰のさまを
圖し朝光進覧の繪の本邦四大師の繪也數巻の中その両部頻と郷僧
愛ふ源氏、うば老ろを賜と定ちるものち足利家の時よ及て貴か
玄子繪巻物を弄びめのそいさゝ〳〵家そ繪合ありけ
ま太平記巻十八よ関白左大臣の家ふて画合めりて洞流の左大将の出
されろ繪よ源氏の優婆塞の宮の郷女もそて真木柱よ居隠まて狂比
墨を調のひ〳〵よ雲隠まてたる月の儀よ最おくさ〳〵出たれが廂ろぐでも
掃〳〵ぢめりひそとく撥をあげろ〳〵さ〳〵のぞれたる顔つれのみ〳〵膺懲て
まほやかろる気色の限そる〳〵筆を盡〳〵てぞ完たりろるどいのこと
さえたりむくそらの粧奥よ種との巧をはくされ〳〵ぢのち〳〵ま新よそらと
さへ彼そ親そ〳〵繪巻物とち花よらぐそて慶長の後もそもそち世よ
行まへ書雖のそろれ画とろふのをま年よ玉ちる花よ剰人よ細立歩来よ

れが書肆ホその便利よろそ〳〵彼繪巻物の中よ俗くろもの元そみ
印刻ち〳〵ろよ繪巻物い廉よて〳〵ろれど〳〵もろれを好む人い数金を費
〳〵ろれを購ひ或い寫〳〵ろむるもち手が管見をりろ〳〵十が二三をい
不後之事合戦記。円光大師行状記。駿牛繪詞。四十図三。六番歌合。
七十一番歌合。十二類歌合。調度歌合。虫合。鳥合。福富草紙。雀松原常盤
地物語。花鳥風月。太秦草紙。天狗内裏。北野大茶湯記。文正草紙。済か
ほうそ。小町草紙。嶋そろう七草草の紙。猫の草紙。浦嶋之郎物草一太郎。子
数盡二八比丘尼。七人比丘尼。四人比丘尼。女郎花ホこ餘りく〳〵もの〳〵べ〳〵や。
まび猴蟹合戦。桃太郎物語。菊咲翁。鬼の仇後。鼠の嫁入などいふりのもこ
みちめい繪巻物みろ〳〵めをけんろ〳〵ろぐれも他よ物語まいめれどその据とろ
ろろうふおよ注そろぶ如〳〵只鬼よ痂ぐ多人を血食よらそろ〳〵
猴のつぎい并よ宇治拾遺物語よ見よ白猟の嫁入といふ人今も田舎ろ

すりこれらのふでよきうつくしき書籍どもあそびうくほうらおんもうるさられ
がてそのこころの書よ輯(マキ)うつしてうるほど抑(ひも)くの藁(わら)しに考(かんがへ)ふるに注(そゝ)
ぎ加(くは)ふるうつくしき書(ふみ)を引(ひき)よせ語(かた)らひ給(たま)ふにその本文(ほんもん)を渉(わた)うさ
めでたく偉(いと)なる五日(いつか)ばかりよりの巻(マキ)を草(かき)つ果(はて)たれどもうらちかゆめの悩(なやみ)をる
ゆめおのれとうれゆくうれゆくうるさきを注(そゝ)ぎんとてくに和漢の志傳(こゝろづて)を引(ひき)
用(もち)ゐ納(こゝろ)を金(こがね)くに弦(つる)を玉(たま)よりとるよひとつとてくろある人ゆゑ笑(わら)るべくれど彼(か)
筆妙(くしび)が徒然草(つれづれぐさ)なる後(のち)のこの言の葉さくちかをとく野槌(のづち)蛟槌(かづち)うちはけう
巻(マキ)のうらくうれがゆうさるくりやとて伽(とぎ)ぞうくりやとうんくうゆゑ